

第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	16.6	5.3		BCEGH	B	橙	95	
2	環	(14.9)	4.8		BCEGH	C	鈍黄橙	35	重角礫多
3	環	(15.1)	(5.2)		BCDEGH	A	赤	50	
4	環	12.5	4.6		BCEFGH	A	橙	80	
5	環	13.9	(5.0)		BCDEGH	A	橙	95	焼成後穿孔
6	環	(15.6)	(3.1)		BCEG	A	明赤褐	15	カマド
7	環	(15.2)	(4.1)		BCEGH	A	明赤褐	30	貯蔵穴
8	環	(13.4)	(6.6)		BCEH	A	黒褐	60	外面ケズリ精緻 内外黒色光沢あり 胎土分析 N011
9	環	(15.1)	(6.2)		BCEGH	B	橙	35	
10	環	(12.6)	4.3		BCEGH	B	鈍橙	35	粗製 内面軟質木口ナデ明瞭
11	高環	(14.2)	(5.1)		CEGH	B	橙	15	
12	鉢	(12.8)	6.3	4.8	BCEGH	C	鈍橙	45	
13	甕	12.0	(8.0)	(3.3)	BCEGH	C	鈍黄橙	95	貯蔵穴とカマドの接合
14	甕	14.5	12.1	4.8	BCEGH	B	橙	80	貯蔵穴
15	甕	12.0	10.6	6.3	BCEGH	B	鈍橙	85	
16	壺	18.0			BCEGH	C	灰黄褐	80	端部沈線状
17	甕	(14.2)			BCEGH	A	鈍橙	50	
18	甕	16.0			BCEGH	A	橙	100	端部沈線状
19	甕	(24.4)			BCEGH	B	橙	25	
20	甕			7.0	BCEGH	B	鈍橙	85	貯蔵穴
21	甕	22.6			BCEGH	A	灰褐	70	
22	甕			7.0	BCEGH	B	鈍黄褐	15	カマドと接合
23	支脚	5.8	13.8		BCEGH	B	鈍橙	100	カマド
24	土鉢	長3.28	径0.93	重2.23					
25	土鉢	長6.36	径2.42	重25.47					
26	土鉢	長4.62	径1.26	重6.04					

うように13の小形甕が逆位で検出された。なお支脚は焼成部底面からは僅かに浮いて出土した。

その他床面直上から遺物が散逸して出土した。2の環は口縁部下方の軟質木口状工具による断続ナデカ明瞭である。5は南壁際より出土したが底面に焼成後穿孔をしている。8の環は内外面黒色で外面は精緻なケズリにより光沢をもつ。また土鉢も3個体出土した。

第46号住居跡 (第31図)

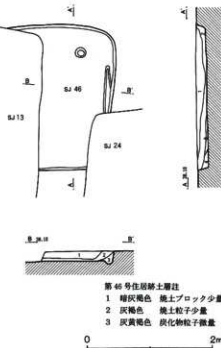
第46号住居跡はE-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第13、24号住居跡に切られる。南北軸方向はN-4°-Wを指す。

覆土は3層からなる自然堆積と考える。上層は少量の焼土粒子を含有していた。

南北軸長2.31mであり、竪穴住居跡と認定し難いが、部分的に壁溝が検出されたことと、ピットが1基検出されたことから住居跡と判断した。

出土遺物は僅少で、図化可能なものはなかった。

第31図 第46号住居跡



第21号住居跡 (第32図)

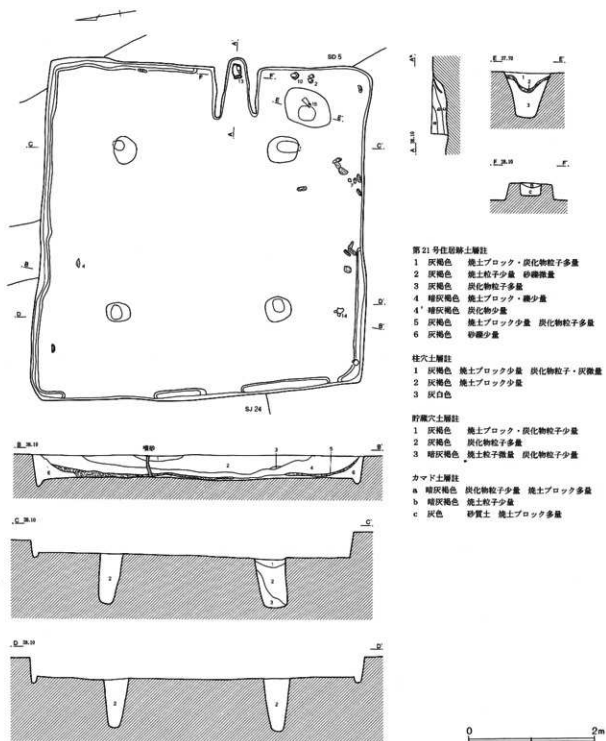
第21号住居跡はE-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第24号住居跡を切っていた。主軸方向はN-100° - Eを指す。

主軸長5.35m, 副軸長は5.25mであり、やや歪んだ

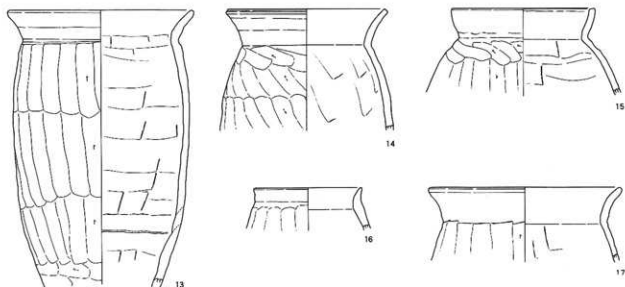
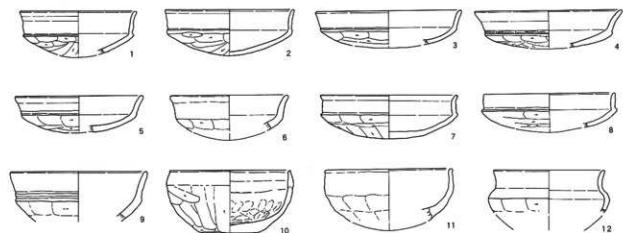
第32図 第21号住居跡

方形を呈する。南東コーナー部以外から断続的に壁溝が検出された。

覆土第5層は炭化物、焼土ブロックを多量に含むが、各層の流入は自然堆積を示すものと考えられる。また覆土を切る噴砂が検出されたが住居跡形態や床面に大



第33図 第21号住居跡出土遺物



きな影響は認められなかった。

主柱穴の深さはP 1=0.80m、P 2=0.84m、P 3=0.75m、P 4=0.80mといずれも深かった。柱間はP 1-2.58m-P 2-2.60m-P 3-2.65m-P 4-2.74m-P 1であった。

平面形態不整形の貯蔵穴は径0.75×0.55m、深さ0.70mであり、間層に炭化物層が認められた。住居跡覆土第5層に対応すると思われる。覆土中から遺物が出土した。

カマドは東壁中央僅かに南よりから検出された。カマド長0.94m、同幅0.26mで、煙道部は削平されていたと考える。床面と同レベルの燃焼部からやや急に立ち上がり煙道部に移行していたと思われる。袖内面の

第21号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(12.4)	(5.0)		BCEGH	B	橙	25	
2	環	(13.7)	4.9		BCEGH	B	橙	45	
3	環	(15.4)	(3.9)		BCEGH	B	橙	25	
4	環	(15.8)	(4.0)		BCDEGH	B	橙	30	
5	環	(13.6)	(3.9)		BCEGH	B	橙	40	
6	環	(12.6)	(4.8)		BCDEGH	B	橙	25	
7	環	(14.6)	4.6		BCDEGH	B	橙	20	
8	環	(14.0)	(4.1)		BCEGH	B	黒褐色	15	
9	環	(14.6)			BCEGH	B	橙	25	カマド
10	塊	(12.8)	6.6	6.0	BCDEGH	C	橙	40	SJ-24と接合 内面指頭圧痕明瞭
11	塊	(13.6)	(6.5)		BCEH	C	橙	20	
12	鉢	(11.9)			BCDEGH	B	鈍橙	45	
13	甕	19.8			BCDEGH	B	橙	25	下部煤点在
14	甕	17.2			BCEGH	B	橙	90	カマドと接合 頸部1.5cm幅で煤水平に付着
15	甕	(15.3)			BCEGH	A	鈍黄橙	20	貯蔵穴
16	甕	(11.6)			BCEGH	C	鈍橙	30	
17	甕	(20.6)			BCEGH	C	鈍黄橙	30	
18	編物石							12個体	
19	貝果穴底泥岩			重2.31					

被熱硬化は顕著であった。カマド中からは甕が出土したが支脚は出土しなかった。

出土遺物（第33図）

遺物は覆土下層から床面直上にかけて出土したものが多く、やや住居跡南半に偏っていた。残存率はやや不良のものが多い。8の環は器面の状態が不良であるが部分的に黒褐色を呈し、やや光沢をもつことから黒色処理された可能性がある。10の塊は24号住居跡出土のものと同接したが、残存率および出土位置から本住居跡に伴うものとした。内面に指頭圧痕が認められた。カマド内からは13の甕が横位で出土した。頸部に幅1.5cm程の煤が水平に付着していた。

貯蔵穴覆土上層からは15の甕が出土した。口縁部は僅かに内彎しながら立ち上がる。端部は僅かに凹状を呈する。また南壁際からは編物石が12個体出土した。長さ13.5cm前後、幅5.5cm前後で形態は近似している。貝果穴底泥岩も1個体出土した。

第24号住居跡（第34図）

第24号住居跡はE-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第46号住居跡を切り、第21号住居跡に切られる。また第5号溝に壁上面を壊されていた。主軸方向はN-90°-Wを指す。主軸長4.60m、副軸

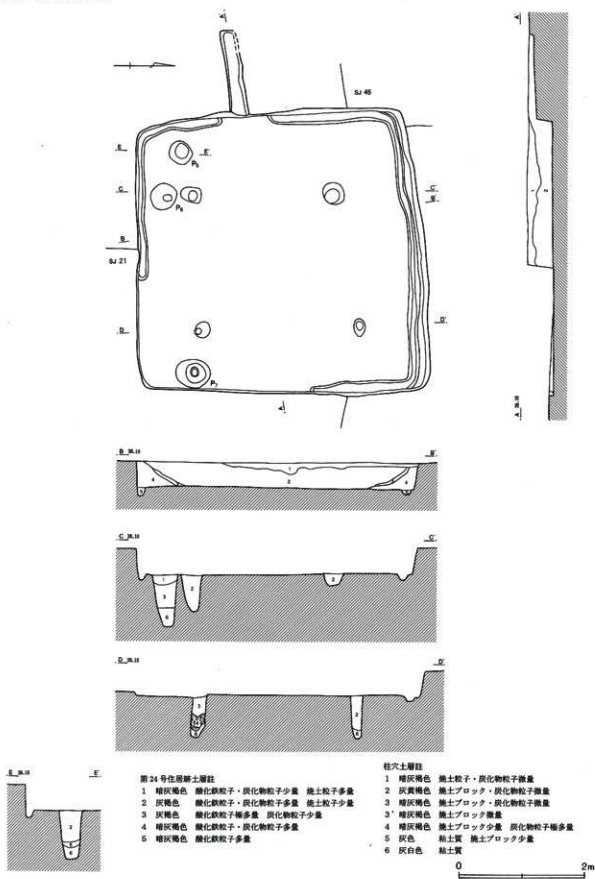
長は4.60mであり、やや歪んだ方形を呈する。カマド煙道部の主軸は住居跡主軸からやや南よりにずれる。南東コーナー部以外には断続的に壁溝が巡る。床面は重複する第21号住居跡よりも僅かに低かったため床面はすべて検出できた。

主柱穴の深さはP1=0.18m、P2=0.70m、P3=0.65m、P4=0.59mである。柱間はP1-2.09m-P2-2.59m-P3-2.15m-P4-2.22m-P1であった。P3覆土中層からは多量の炭化物粒子が検出された。また最下層の第6層は灰白色の粘土層であった。

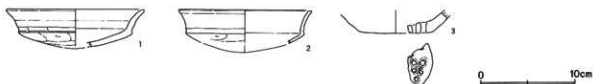
定型的な位置および規模の貯蔵穴はなかった。P5、6、7はいずれも深く柱穴状を呈するが、性格は不明である。ただし覆土の類似性から本住居跡に伴うものとする。

カマドは西壁中央南よりの壁溝の途切れる部分に構築されていたと思われるが、袖等は検出されず煙道部のみ遺存していた。燃焼部も確定できなかったが、燃焼部から煙道部にかけて急激に立ち上がっていたと思われる。煙道部長1.35m、煙道部幅0.20mの底面水平の形態であるが、被熱硬化面等は検出されず、覆土にも炭化物、焼土の密集部は確認されなかった。

第34図 第24号住居跡



第35図 第24号住居跡出土遺物



第24号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.8)	(4.1)		BCEGH	B	橙	25	
2	坏	(14.2)	(4.5)		BCEGH	A	橙	20	
3	甌			(8.0)	BCGH	A	鈍橙	30	多孔

出土遺物 (第35図)

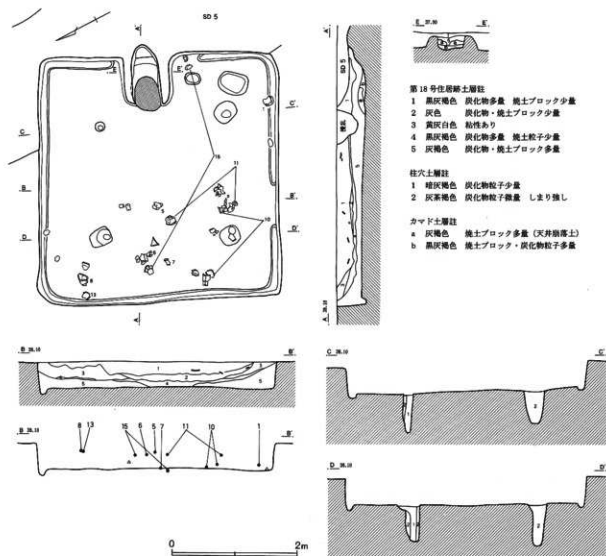
遺構の遺存状況は良好であったが、遺物は覆土中より少量出土したのみである。凶化できたものも残存率は低かった。3は多孔式の甌底部である。

第18号住居跡 (第36図)

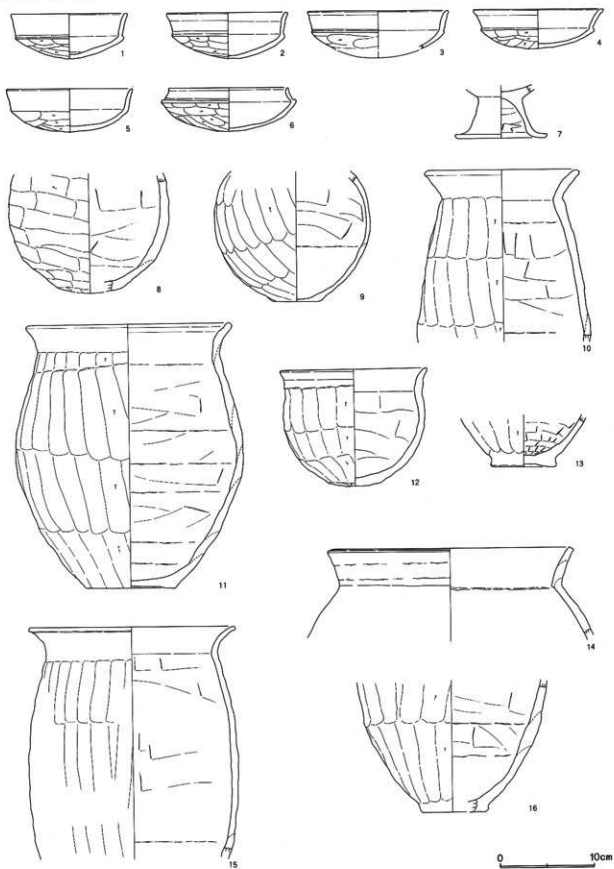
第18号住居跡はF-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第5号溝に壁上面を壊されていた。

主軸方向はN-120° - Eを指す。主軸長3.92m、副

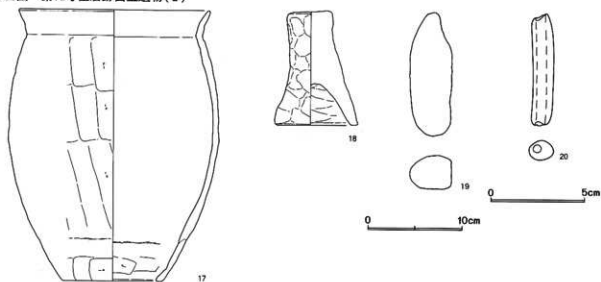
第36図 第18号住居跡



第37图 第18号住居跡出土遺物(1)



第38図 第18号住居跡出土遺物(2)



第18号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	12.5	4.8		BCDEGH	B	橙	95	
2	環	12.9	4.9		BCGH	B	橙	95	
3	環	(15.0)	(5.0)		BCEGH	C	鈍橙	25	
4	環	13.9	4.2		BCEGH	B	鈍黄橙	85	
5	環	(13.6)	4.5		BCEGH	B	橙	45	覆土上層
6	環	12.2	4.6		BCEGH	B	橙	60	覆土上層
7	高環		5.6	9.8	BCEGH	A	明赤褐	85	
8	壺			(6.8)	BCEGH	B	橙	35	覆土上層
9	壺			5.2	BCGH	B	鈍橙	80	
10	甕	(16.6)			BCEGH	B	鈍橙	60	
11	甕	(22.0)	27.9	(9.6)	BCEGH	A	明赤褐	30	覆土上層
12	甕	(15.6)	12.4	5.6	BCDGH	C	鈍黄橙	50	
13	甕			7.1	BCEH	A	鈍赤褐	80	覆土上層
14	甕	(26.4)			BCEGH	B	橙	25	
15	甕	(22.0)			BCEGH	C	鈍黄橙	25	覆土上層
16	甕			(7.2)	BCGH	A	鈍赤褐	40	
17	甎	(20.4)	28.8	(10.6)	BCEGH	B	橙	15	
18	支脚	4.7	12.0	8.6	BCEGH	A	明赤褐	95	土製 ワラ状の痕跡あり
19	編物石								1個体
20	土鏃	長5.97	径1.42	重11.04					

軸長3.81mであり、方形を呈する。遺構の遺存状況は良好で残存壁高0.42mであった。

覆土の1、4層には厚さ1cm内の炭化土層が数枚認められたが、各層の流入状況から自然堆積と思われる。南壁側のみ一部断絶する壁溝が巡る。

主柱穴の深さはP1=0.53m、P2=0.66m、P3=0.56m、P4=0.63mである。柱間はP1-1.84m-P2-2.00m-P3-1.73m-P4-2.03m-P1

であった。

カマド右側の貯蔵穴は、平面形態は不整形円形を呈し、径0.46×0.34m、深さ0.10mであった。遺物は出土していない。またカマド右脇からもピットが検出された。

カマドは東壁中央やや左に構築され、燃焼部長0.78m、同幅0.40mであった。煙道部残存長は0.20m、同幅0.28mであり第5号溝に壊されていた。浅く掘り込

まれた燃焼部からやや急に立ち上がり煙道部に至る。
燃焼部および袖内面の被熱硬化は顕著であった。

出土遺物 (第37・38図)

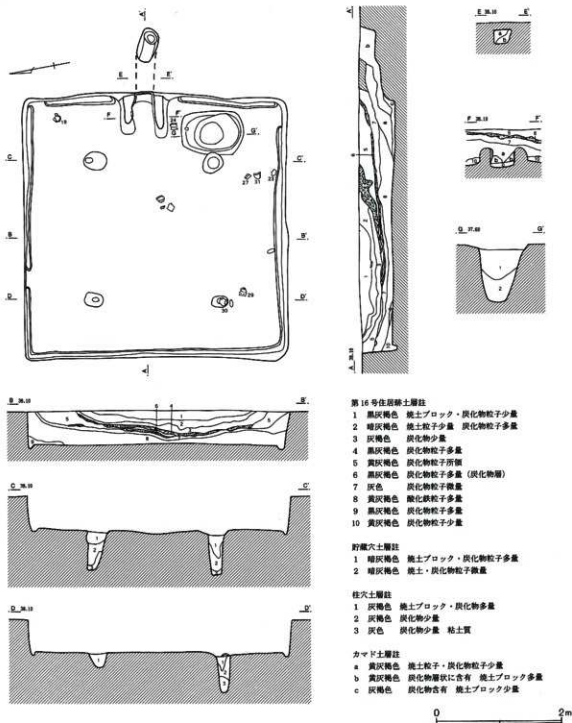
遺物の出土状況は、住居跡中央に向かっての流れ込みを示していると考える。特に炭化物を多量に含有していた1層からの出土量が顕著であった。またカマド

からは遺物は出土しておらず、本住居跡に確実に帰属する遺物は認められなかった。18は覆土中から出土した土製支脚である。外面に指頭玉痕が明瞭に残る。

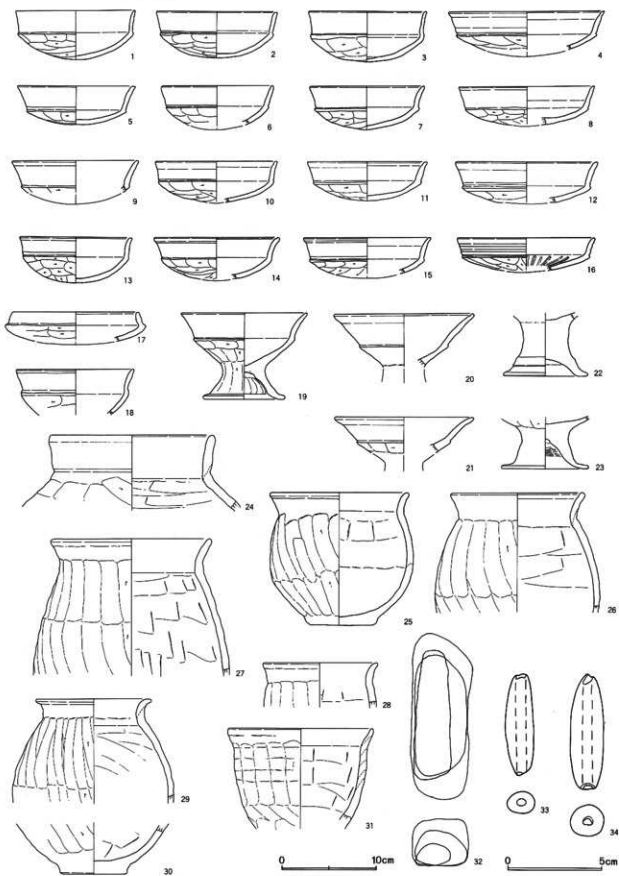
第16号住居跡 (第39図)

第16号住居跡はE、F-4、5グリッドに位置する。主軸方向はN-110°-Eを指す。主軸長4.20m、副

第39図 第16号住居跡



第40图 第16号住居跡出土遺物



第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	12.6	5.2		BCEGH	A	橙	70	内面黒色 二次被熱	
2	坏	13.0	4.9		BCEGH	A	鈍橙	70		
3	坏	(12.6)	5.5		BCGH	B	橙	60		
4	坏	(16.6)	(4.8)		BCDEGH	B	橙	25		
5	坏	(12.6)	4.1		BCEGH	B	鈍橙	45		
6	坏	(12.0)	(4.7)		BCDEGH	B	橙	25		
7	坏	(12.3)	4.6		BCEGH	B	橙	25		
8	坏	(14.6)	(4.1)		BCEGH	B	橙	35		
9	坏	(13.6)	(4.5)		BCDGH	B	橙	40		カマド
10	坏	(13.0)	(4.4)		BCEGH	B	橙	50		
11	坏	(12.8)	4.1		BCEGH	B	橙	15	端部沈痂	
12	坏	(15.2)	(4.5)		BCEGH	A	灰黄褐	15		
13	坏	(12.0)	4.8		BCDEGH	A	橙	25		
14	坏	(13.4)	(4.6)		BCDEGH	C	鈍橙	40		
15	坏	(13.6)	(4.3)		BCEGH	A	橙	35		
16	坏	(14.6)	(3.7)		ABCEGH	B	鈍橙	25		体部内面放射状ヘラミガキ
17	坏	(13.6)	(3.5)		BCEGH	C	鈍橙	15		
18	鉢	(12.6)			BCEGH	B	鈍褐	25		
19	高坏	(13.4)	9.1	(8.7)	BCEGH	B	橙	40		
20	高坏	15.0			BCEGH	B	鈍赤褐	65		
21	高坏	(14.9)			BCEGH	B	橙	50		
22	高坏			9.0	BCEGH	A	橙	80		
23	高坏			9.4	BCEGH	B	橙	80		
24	壺	(17.8)			BCEGH	C	橙	25	3個体	
25	甕	14.8	14.1	7.0	BCEGH	B	鈍赤褐	80		
26	甕	(14.4)			BCDEGH	A	明赤褐	30		
27	甕	17.4			BCEGH	B	橙	85		
28	甕	(12.4)			BCEGH	B	橙	30		
29	甕	(12.4)			BCEGH	A	橙	40		
30	甕			7.0	BCEGH	A	黒褐	50		
31	甕	(14.4)			BCEGH	B	橙	25		
32	編物石									
33	土鏝	長5.35	径1.63	重10.86						
34	土鏝	長6.14	径1.94	重21.42						

軸長は4.20mであり、端正な方形を呈する。遺構の遺存状況は良好で残存壁高0.54mであった。部分的に断続する壁溝が巡る。

覆土第4、6層には多量の炭化物が含有していたが、覆土中からは少量の遺物が出土したのみである。

主柱穴の深さはP1=0.70m、P2=0.60m、P3=0.24m、P4=0.60mである。柱間はP1-2.20m-P2-1.98m-P3-2.20m-P4-2.00m-P1であった。

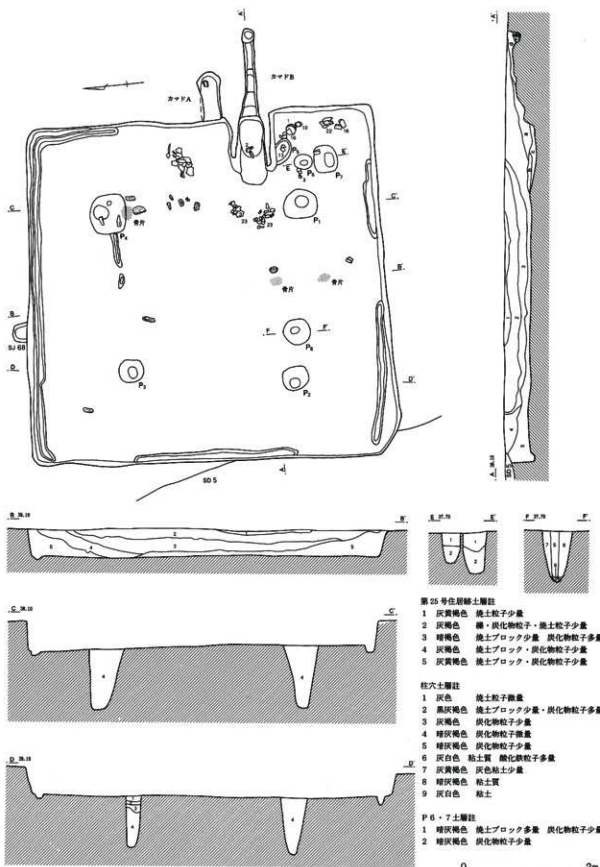
底面円形の貯蔵穴は径0.98×0.68m、深さ0.92mであり、緩やかな段を有する。覆土上層には炭化物を多量に含有していた。

カマドは東壁ほぼ中央に構築され、煙道部天井が未崩落であった。燃焼部長0.65m、同幅0.34m、煙道部長1.03m、同幅0.23mで、床面から緩やかに下がる燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に至る。煙道部下面は途中で段を有する。先端には浅い煙出しピットを有する。袖内面の被熱硬化は顕著であったが支脚は出土しなかった。

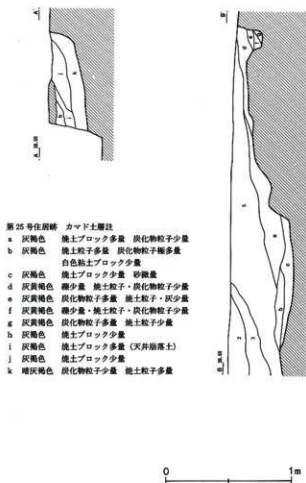
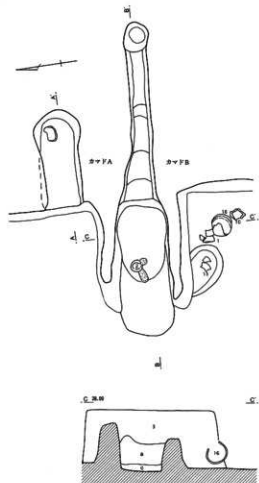
出土遺物（第40図）

遺物は、覆土下層から床面直上にかけて比較的多く出土した。須恵器蓋模倣の坏は口径13cm内のやや深めて口縁部がほぼ直立するものが多い。16の有段口縁坏は内面にやや雑な暗文を施す。なおカマド内部からは

第41図 第25・68号住居跡



第42図 第25号住居跡カマド



9の環が出土したのみである。編物石は3個体、土錘は2個体出土した。

第25・68号住居跡 (第41・42図)

第25・68号住居跡はE-5、6グリッドに位置する。第68号住居跡はカマドの煙道部のみ検出されたものである。第25号住居跡のカマドの造り替えの可能性もあるが、柱穴、壁溝等からは住居跡拡張の痕跡は認められなかったことと、25号住からもカマドが2基検出されたことから、25号住に煙道部以外壊されたと判断した。

第25号住居跡は第5号溝に西壁上面を僅かに壊されていた。主軸方向はN-97°-Eを指す。主軸長5.57m、副軸長は5.80mであり、方形を呈する。

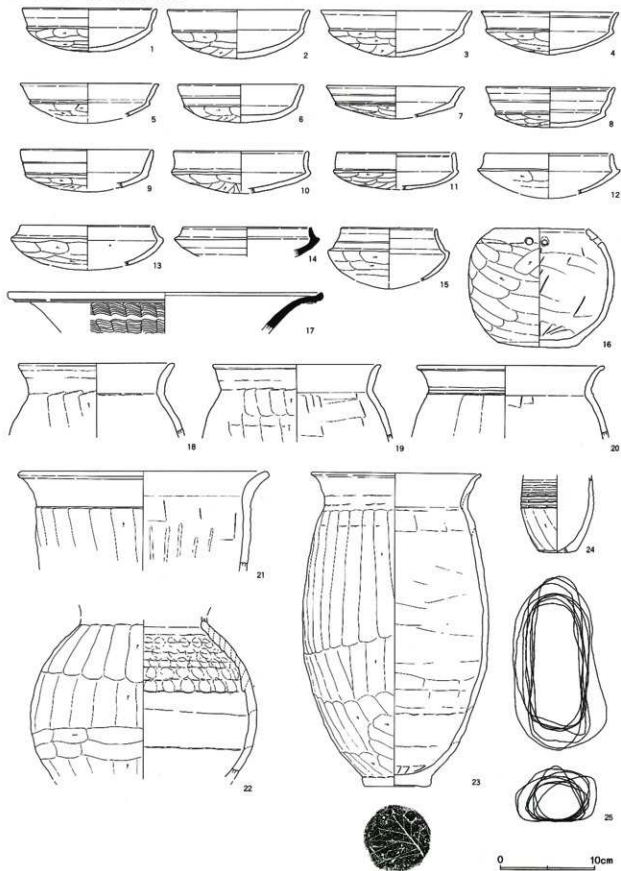
覆土第3層からは炭化物粒子が多量に検出されたが、各層の流入状況から自然堆積を示すものと考えられる。

壁際には断続的な壁溝が巡る。

主柱穴の深さはP1=1.00m、P2=0.90m、P3=0.80m、P4=0.95mといずれも深かったが覆土はほぼ均一であった。柱間はP1-2.88m-P2-2.60m-P3-2.55m-P4-3.10m-P1であった。またP8は深さ0.81mと深く、覆土は柱穴状を呈する。68号住に伴う可能性があるが、対応すべき柱穴が検出されなかったため帰属は不明である。

定型的な貯蔵穴はなかったが、カマド袖右側からは3基のピットが検出された。P5はカマドB右袖下に構築されており、カマドの造り替え前に構築されたと想定される。P6、7はいずれも径は小さいが、深さ0.47m、0.64mと深かった。なおP4の西側には深さ0.03mほどの溝が検出された。住居跡主軸とほぼ同じ方向を向く。

第43図 第25号住居跡出土遺物



第25号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.3	4.6		BCEGH	B	明赤褐	85	カマドB
2	坏	15.2	5.4		BCEGH	B	橙	80	
3	坏	(16.0)	4.9		BCEGH	B	赤	50	
4	坏	(14.6)	4.6		BCEGH	B	橙	35	
5	坏	(14.8)	(4.2)		BCEGH	B	橙	25	
6	坏	(13.4)	4.0		BCEGH	C	橙	35	
7	坏	(14.7)	(3.5)		BCEGH	B	橙	20	
8	坏	13.8	4.2		BCEGH	B	橙	45	
9	坏	(14.2)	(4.5)		BCEFGH	C	鈍黄橙	30	
10	坏	(14.4)	(4.5)		BCEGH	B	橙	25	
11	坏	(12.8)	(4.0)		BCEGH	B	橙	60	
12	坏	(13.8)	(4.7)		BCDEGH	C	鈍黄橙	15	
13	坏	(14.2)	(4.7)		BCDEGH	B	橙	25	
14	須恵器环	(13.8)			C	A	灰白	15	胎土白色粘土含有
15	鉢	(10.2)	(6.5)		BCEGH	A	明赤褐	20	口縁部孔2単位 外面から焼成前穿孔
16	無頸壺	10.0	12.5	8.2	BCEGH	B	橙	95	
17	須恵器甕	(33.6)			C	B	灰	20	
18	甕	(16.6)			BCEGH	C	鈍橙	25	
19	甕	(17.8)			BCGH	A	鈍橙	20	
20	甕	(19.0)			BCEGH	B	橙	10	
21	甕	(26.8)			BCEGH	B	橙	85	
22	壺				BCEGH	A	橙	45	
23	甕	18.0	33.1	6.9	BCGH	B	橙	55	
24	鉢			4.2	CEGH	A	赤黒	35	
25	編物石								8個体

カマドは東壁中央からカマドA、その右側からカマドBが検出された。袖等の有無によりAからBの造り替えと思われる。カマドAは煙道部のみ遺存していた。煙道部長0.77m、同幅0.23mである。先端部平面形態はやや円みを帯びる。部分的に天井部が残存していた。覆土からは多量の焼土ブロック、焼土粒子が検出された。

カマドBは燃焼部長0.87m、同幅0.34m、煙道部長1.42m、同幅0.10mであった。浅く掘り込まれた燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に至り、2段ほどの緩やかな段を持ちながら傾斜し、深さ0.20mの煙出しピットに至る。袖内面の被熱硬化は顕著であった。

第68号住居跡の煙道部は残存長0.26m、同最大幅0.31mである。覆土からは少量の焼土粒子が検出されたが、遺物は出土しなかった。

出土遺物（第43図）

遺物は覆土下層から床面直上にかけて比較的多く出土したが、カマド周辺からの出土量が多かった。カマ

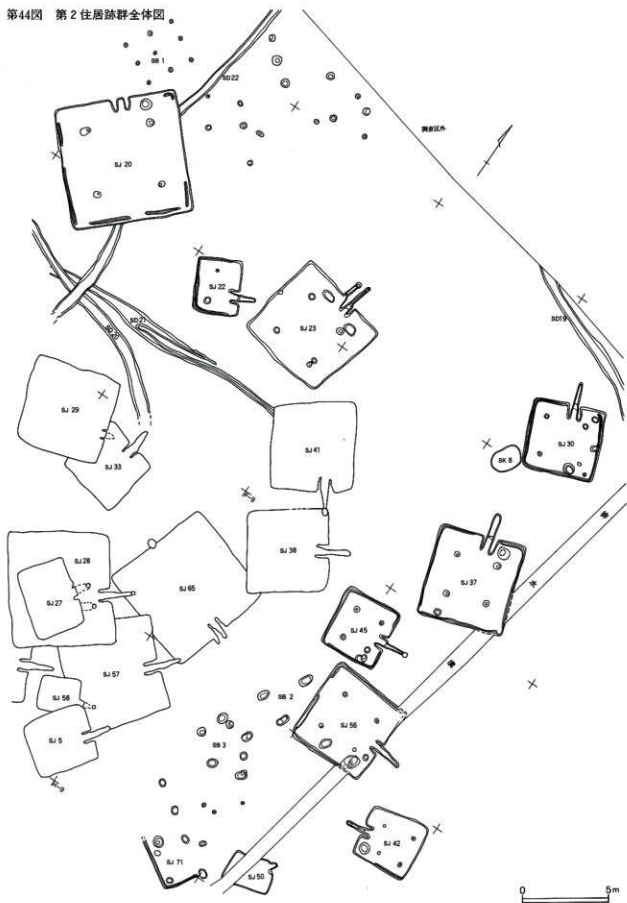
ド内部からは自然石の支脚が2個体出土した。また2の坏が支脚を覆うように正位で出土した。

カマド右から僅かに浮いて出土した16の無頸壺は口縁部に2単位の焼成前穿孔がある。14の須恵器环、17の須恵器甕口縁部は覆土下層から出土した。22の壺は内面に輪積み痕および指頭王痕を明瞭に残す。二次被熱痕が明瞭である。23の甕はカマド前方の床面直上およびP4覆土中から散逸して出土した。

24の土師器は胴部上半に沈線状のくぼみが数段認められるが、土師器环の襷部整形技法に近似した断続的なものである。胴部下半は縦位ケズリ後、ナデ、底部は外周部ケズリ後全体にナデ調整を行い、僅かに凸状となると思われる。また口縁端部は欠損しているが、残存部最上位内面に小さな外反が認められることから口径7.4cm、器高8.3cm程と想定される。

またP1、P4間を中心に編物石が8個体出土している。また床面には微小な骨片が数カ所に散在していたが、脆弱で同定はできなかった。

第44图 第2住居跡群全体图



(4) 第2住居跡群

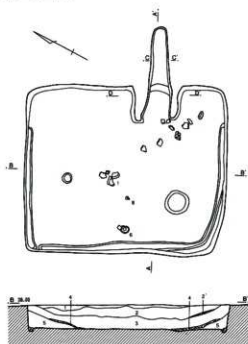
第2住居跡群は第1住居跡群東側に位置し、本遺跡で最も住居跡が密集する第3、4群住居跡の外周にあたる。したがって本群を境に東側は急激に住居跡が減少する。

本群中においては各住居跡は近接するものの重複関係はなかった。また本群中から検出された溝はすべて古墳時代後期に帰属するが、いずれも住居跡を壊していた。

確認面地山には第1住居跡群付近のような礫は含有されておらず、第20、50、71号住以外は遺構の遺存状況は概ね良好であった。また本調査区最大規模の第20号住居跡の周辺からは後述する第1号掘立柱建物跡などが分布しており、竪穴住居跡は検出されなかった。第56号住居跡南からも第3号掘立柱建物跡をはじめ、ピット群が存在する。

本群を構成する第30、42、56号住の床面直上からは炭化材が多量に検出された。30号住のカマドからは2個体の甕が並列して出土した。42号住から出土した環の中からは白玉100個体が検出された。また56号住からは長胴甕12個体等、多量の遺物が出土した。

第45図 第22号住居跡



第22号住居跡 (第45図)

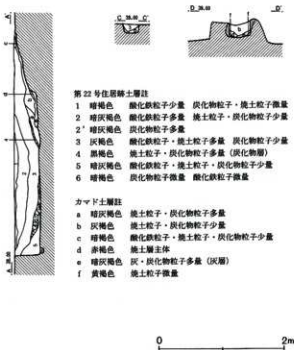
第22号住居跡はD、E-8グリッドに位置する。主軸方向はN-62°-Eを指す。主軸長2.70m、副軸長は3.23mであった。小形の横長長方形である。東側には第23号住が隣接するが重複はしていないかった。

2'、4層は炭化物層であるが、各層の流入状況は自然堆積を示すと考えられる。壁溝は東側以外は連続して巡っていた。2基のピットが検出されたがいずれも深さ0.03~0.33mと浅かった。

カマドは東壁中央南よりから検出された。燃焼部長0.57m、同幅0.36m、煙道部長0.90m、同幅0.28mであった。燃焼部からはほぼ直に立ち上がり、傾斜する煙道部に移行する。袖内面の被熱硬化は顕著であり、袖内部に5cmほどの赤変硬化が認められた。また灰層の発達も顕著であった。

出土遺物 (第46図)

遺物は床面直上に散逸していたが、カマド内からの出土はなかった。7は口縁部上位で強く屈曲し、赤彩される。比企型環の口縁部と思われる。8は須恵器高環の脚部である。幅の狭い透かしが、3単位ある。また土鏝も1個体出土している。



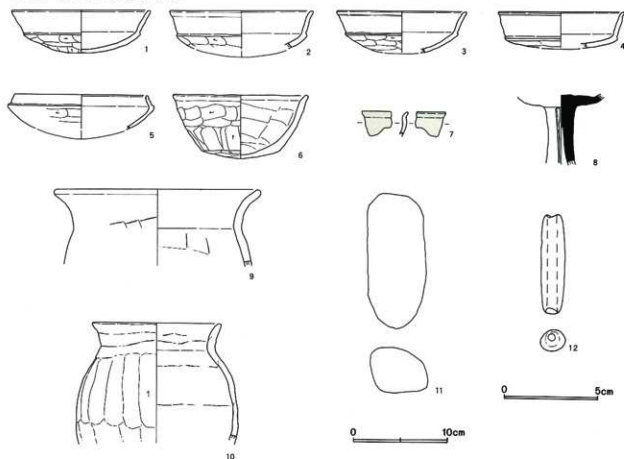
第22号住居跡土層註

- 1 暗褐色 酸化鉄粒子少量 炭化物粒子・焼土粒子微量
- 2 暗灰褐色 酸化鉄粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2' 暗灰褐色 炭化物粒子多量
- 3 灰褐色 酸化鉄粒子・焼土粒子多量 炭化物粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化物粒子多量 (炭化物層)
- 5 暗灰褐色 酸化鉄粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 6 暗褐色 炭化物粒子微量 酸化鉄粒子微量

カマド土層註

- a 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子多量
- b 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- c 暗褐色 酸化鉄粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- d 赤褐色 焼土層主体
- e 暗灰褐色 灰・炭化物粒子多量 (灰層)
- f 黄褐色 焼土粒子微量

第46図 第22号住居跡出土遺物



第22号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.8	4.5		BCEGH	A	橙	80	胎土白色粘土含有
2	坏	(15.4)	(4.9)		BCDEGH	B	橙	30	
3	坏	13.8	(4.6)		BCEFGH	B	明黄橙	25	
4	坏	(13.4)	(4.0)		BCEGH	B	橙	20	
5	坏	14.2	(4.7)		BCDEGH	B	明赤褐	15	
6	鉢	(14.4)	6.8	8.0	BCGH	A	橙	60	
7	坏				CE	A	赤	5	比企型 赤彩
8	須恵器高坏				C	A	暗灰	80	白色亜角礫やや多
9	甕	(22.0)			BCEGH	C	鈍黄橙	20	
10	甕	13.8			BCDEGH	B	鈍橙	80	
11	編物石								1個体
12	土鏃	長5.28	径1.45	重10.26					

第23号住居跡 (第47図)

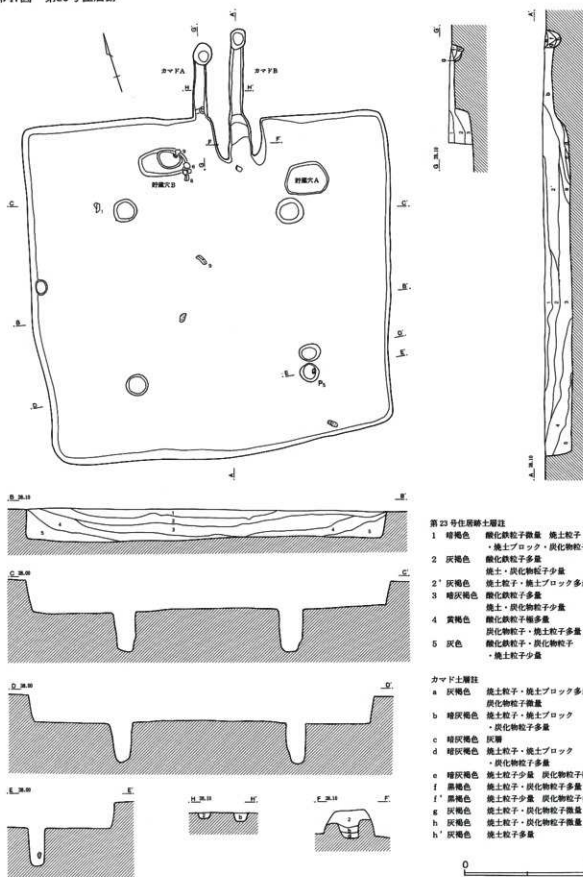
第23号住居跡はD-8、9、E-8グリッドに位置する。主軸方向はN-18°-Eを指す。主軸長5.42m、副軸長は5.75mである。南壁ラインがやや不整だが方形を呈する。

覆土は自然堆積を示すと考えるが、各層には多量の炭化物、焼土を含有する。

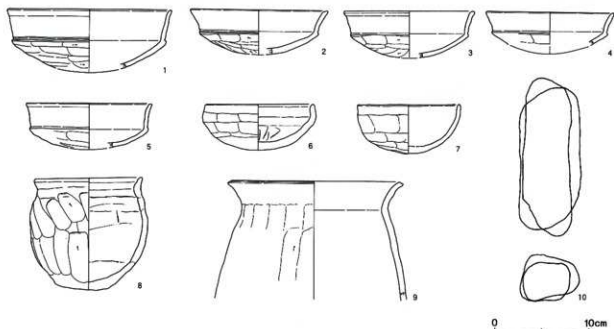
主柱穴の深さはP1=0.65m、P2=0.65m、P3=0.62m、P4=0.64mといずれも深かった。柱間はP1-2.27m-P2-2.79m-P3-2.76m-P4-2.62m-P1であった。P5覆土下層からは礫が出土している。P5はP2に隣接して構築されており深さ0.58mと深かった。西壁際にも小ピットを有する。

貯蔵穴Aは不整楕円形を呈し、径0.69×0.51m、深

第47図 第23号住居跡



第48図 第23号住居跡出土遺物



第23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(17.6)	(6.7)		BCEGH	B	橙	25	
2	環	14.7	(4.7)		BCEGH	B	橙	70	
3	環	(14.0)	(5.0)		BCEGH	B	橙	50	
4	環	13.8	(4.4)		BCEGH	B	橙	50	
5	環	(13.4)	(4.9)		BCEGH	B	橙	20	
6	環	11.6	4.9		BCEGH	A	鈍橙	90	貯蔵穴B覆土
7	環	11.0	5.2		BCGH	B	橙	90	
8	甕	11.6	11.8	5.6	BCEGH	B	鈍橙	80	貯蔵穴B覆土
9	甕	18.7			BCDEGH	B	橙	70	貯蔵穴B覆土
10	編物石								2個体

さ0.05mであった。貯蔵穴Bは不整楕円形を呈し、径0.78×0.45m、深さ0.55mであった。なおカマドの配置からすると、貯蔵穴BはカマドAと近接しており、カマドの造り替えに伴い、貯蔵穴も造り替えられた可能性がある。

カマドは東壁中央からカマドA、その右側からカマドBが検出された。袖等の有無によりAからBの造り替えが想定される。

カマドAは煙道部長1.20m、同幅0.20mである。袖および燃焼部の痕跡はなかった。煙道部底面は水平である。先端部に煙出しピットを有する。

カマドBは燃焼部長0.75m、同幅0.30m、煙道部長1.35m、同幅0.24mであった。床面と同レベルの燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に至る。煙道部底面は

水平であった。深さ0.24mの煙出しピットを有する。灰層の発達は顕著であった。袖内面の被熱硬化は顕著であった。

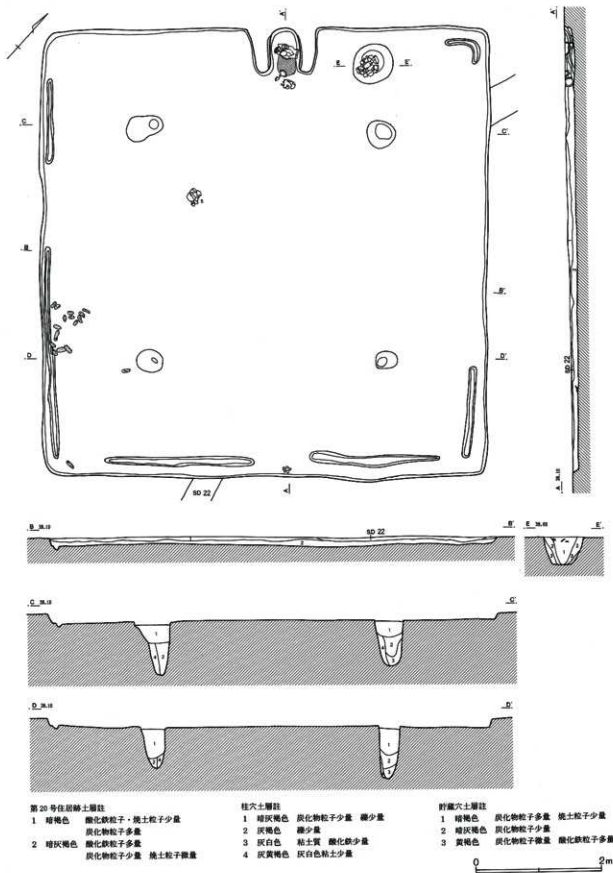
出土遺物 (第48図)

少量の遺物が貯蔵穴B周辺および床面直上から散逸して出土したが、カマド中からの出土はなかった。1の環は大形で、推定口径17.6cmである。9の甕は貯蔵穴B覆土中および床面中央のものが接合した。

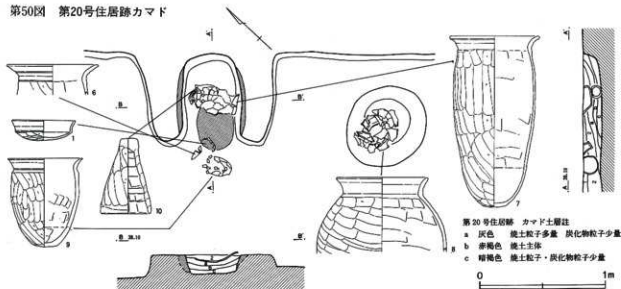
第20号住居跡 (第49・50図)

第20号住居跡はD-6、7、E-7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第22号溝に切られていた。本住居跡に最も近接する住居跡は第22号住居跡が東側におよそ3mの距離を置いて位置する。なお後述するように第1号掘立柱建物跡やピット群が北側に隣接し

第49图 第20号住居跡



第50図 第20号住居跡カマド



ている。

主軸方向はN-43°-Wを指す。主軸長7.15m、副軸長は7.13mと本調査区最大規模の竪穴住居跡である。平面形態は端正な方形である。残存壁高は0.12mと浅かった。壁溝は部分的に掘削されていた。

主柱穴の深さはP1=0.73m、P2=0.83m、P3=0.66m、P4=0.82mといずれも深かった。柱間はP1-3.65m-P2-3.64m-P3-3.74m-P4-3.65m-P1であった。

平面形態円形の貯蔵穴は径0.64×0.64m、深さ0.44mであった。上層から遺物が出土している。

カマドは北壁中央から検出された。燃焼部長0.70m、同幅0.40mであり、火床および袖内面の被熱硬化が顕著であった。遺構深度から推察すると煙道部は削平されていたと考えられる。

出土遺物 (第51図)

遺物はカマド周辺からまとまって出土した。カマド内部からは10の土製支脚が横転した状態で出土し、その直上から横位で7の甕が出土した。また、その前方の床面直上からは9の小形の甕が横位で出土している。6の長胴甕の口縁が隣接して出土している。貯蔵穴覆土上層からは8の大形甕が出土した。胴部下半以下を欠失する。また南壁際床面直上出土の4の坏内部には黒色の樹脂が付着していた。

西壁際床面直上から18個体の縄物石がまとまって出土した。長さ13cm内外で近似した大きさであった。図化成し得た坏はいずれも蓋模倣であるが、6の坏はやや雑な成形で器壁が厚い。

第30号住居跡 (第52～54図)

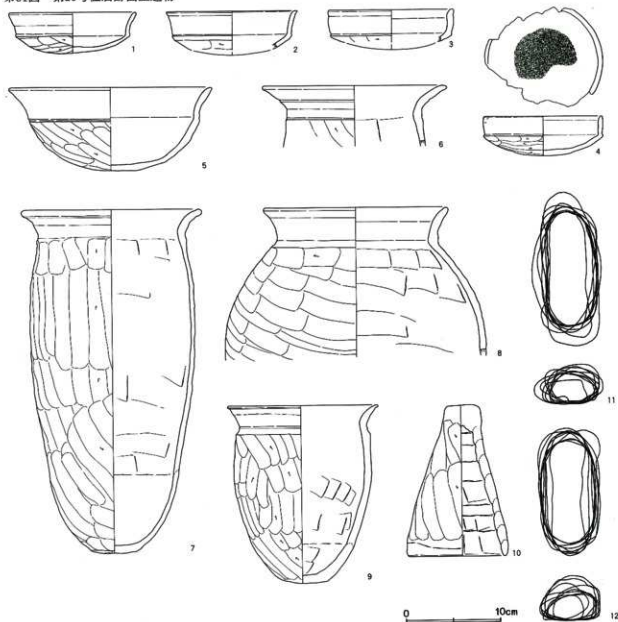
第30号住居跡はD-10グリッドに位置する。主軸方向はN-20°-Wを指す。主軸長4.10m、副軸長4.36mであり、端正な方形を呈する。遺構の遺存状況は良好で残存壁高0.41mであった。第8号土壌が近接しているが重複はしていなかった。

本住居跡の床面直上からは、炭化材および焼土が多量に検出された。覆土第4層には炭化物を多量に含有していた。

主柱穴の深さはP1=0.47m、P2=0.55m、P3=0.63m、P4=0.56mである。柱間はP1-2.16m-P2-2.35m-P3-2.15m-P4-2.33m-P1であった。なお柱穴覆土第1層には多量の炭化材を含有しており住居跡覆土第4層に対応すると思われる。またP5、P6が壁際から検出されたが、深さ0.33m、0.07mと浅かった。カマド右側以外は壁溝が巡っていた。

カマド右側の貯蔵穴Aは、カマド右側に位置し、0.36×0.35m、深さ0.23mであった。貯蔵穴Bは南壁よりに位置し、上位で緩やかな段を有する。径0.63×

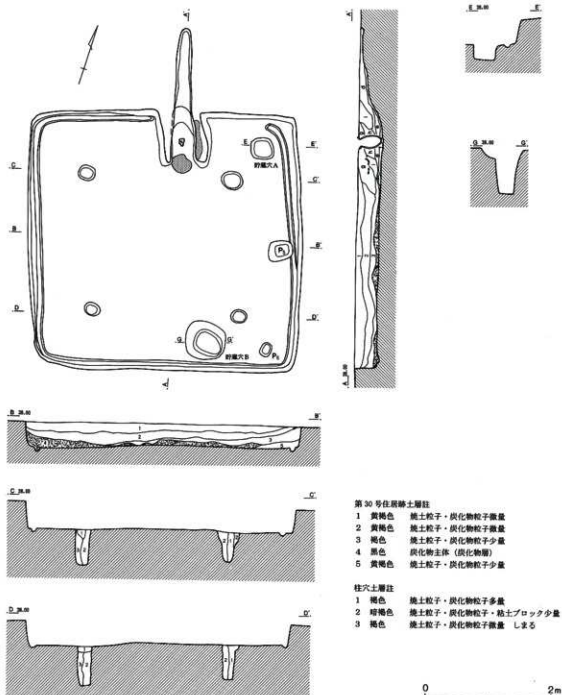
第51図 第20号住居跡出土遺物



第20号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.6	4.3		BCEGH	B	橙	90	カマド
2	坏	(14.0)	(4.7)		BCEGH	B	橙	20	
3	坏	(13.4)	(4.2)		BCEGH	B	橙	20	
4	坏	(12.6)	4.2		BCEGH	A	明赤褐	60	内面黑色樹脂付着
5	鉢	21.8	8.8		BCEGH	C	鈍赤褐	70	
6	甕	(19.6)			BCEGH	A	明赤褐	30	
7	甕	(19.2)	36.5	4.8	BCDEGH	A	鈍赤褐	40	カマド
8	壺	19.8			BCGH	B	橙	90	貯蔵穴
9	甕	16.0	19.0	5.7	BCEGH	A	鈍黄橙	70	カマド
10	支脚	3.5	16.1		BCDEGH	B	橙	100	土製
11	編物石								9個体
12	編物石								9個体

第52図 第30号住居跡



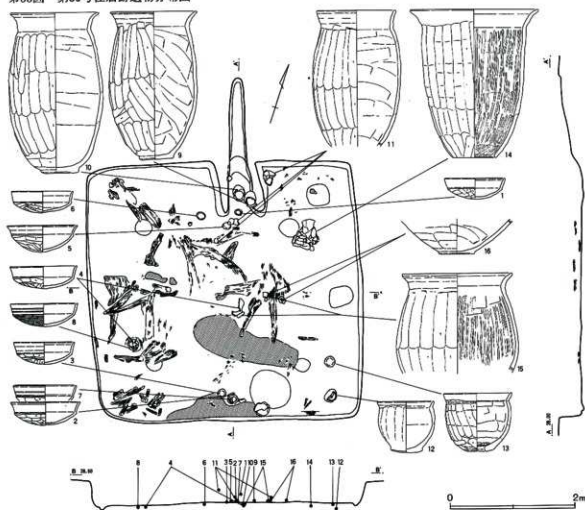
0.60m、深さ0.70mであった。両貯蔵穴からの遺物の出土はなかった。

カマドは北壁中央僅かに東よりに構築され、燃焼部長0.92m、同幅0.35mであった。煙道部長は1.24m、同幅0.25mであった。左袖は僅かにオーバーハングしていた。床面とはほぼ同レベルの燃焼部からやや急に立ち上がり煙道部に至る。煙道部底面は途中で緩やかな

段を有する。煙道部先端底面は僅かに低かった。火床面および袖内面の被熱硬化は顕著であり、煙道部壁も焼土化していた。また右袖上面の被熱硬化も認められた。

カマドは遺存状況が良好で、完形の甕2個体が並列して出土した。10は燃焼部中央に位置し横位に設置された河原石転用支脚の直上であった。9は10のやや前

第53図 第30号住居跡遺物分布図



方に設置され右袖側に傾いていた。右袖とそれに対応するようにやや抉れていたが、9の密着箇所も他の袖内面と同様に被熱硬化は顕著であった。

カマド崩落土と住居跡覆土の観察所見は、まずカマド構築土が一部崩壊した後に住居跡覆土第4層（炭化物層）が流入したと思われる。その後にカマドが本格的に崩壊したと思われる。したがって住居跡覆土最下層である4層はカマドの一部崩壊後の流入、つまり住居跡廃棄後の所産と考える。これは東壁際において、第5層土流入後に第4層が堆積することと矛盾がない。なお1の坏はカマド崩落土上層から出土した。

検出された炭化材はいずれも遺存状況が悪く、加工痕等は認められなかった。炭化材は主に住居跡西側に分布するが、住居跡中央やや南側には焼土の堆積が顕著であった。ただし床面には明瞭な被熱痕はなかった。

なお貯蔵穴等の下層からも明瞭な炭化物の出土はなかった。

出土遺物 (第55図)

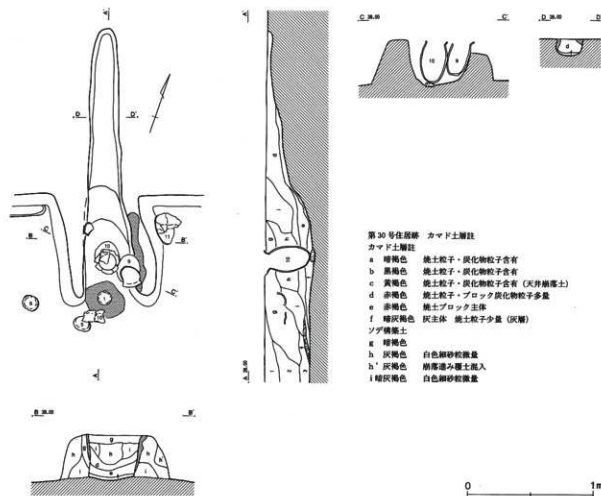
遺物は床面直上から散逸して出土したが、2、7等二次被熱の明瞭な土器もあった。8の坏体部はケズリ後ミガキ調整を施す。13は器形的にはいわゆる小形甕であるが、焼成前穿孔の甕である。

第37号住居跡 (第56～58図)

第37号住居跡はE、F-10グリッドに位置する。主軸方向はN-18°-Wを指す。主軸長5.34m、副軸長5.06mである。端正な方形を呈するが、カマド煙道部は住居跡主軸からやや東にぶれる。遺構の遺存状況は良好で残存壁高0.54mであった。

覆土第3、7層の2枚の炭化物層が検出された。貯蔵穴覆土間層からも炭化物が多量に検出された。また

第54図 第30号住居跡カマド



第30号住居跡 カマド土層註

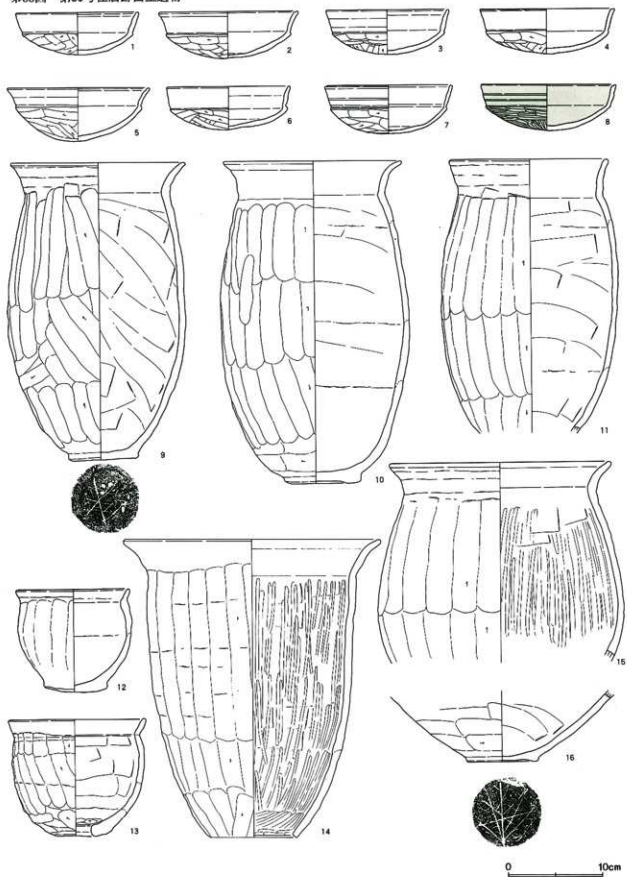
カマド土層註

- a 暗褐色 焼土粒子・炭化物粒子含有
- b 黒褐色 焼土粒子・炭化物粒子含有
- c 黄褐色 焼土粒子・炭化物粒子含有 (大片崩壊土)
- d 赤褐色 焼土粒子・ブロック炭化物粒子多量
- e 赤褐色 焼土ブロック主体
- f 暗灰褐色 灰主体 焼土粒子少量 (灰層)
- ソグ崩壊土
- g 暗褐色
- h 灰褐色 白色細砂粒混入
- i 暗灰褐色 白色細砂粒混入

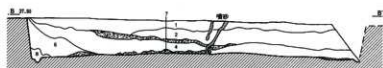
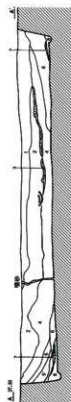
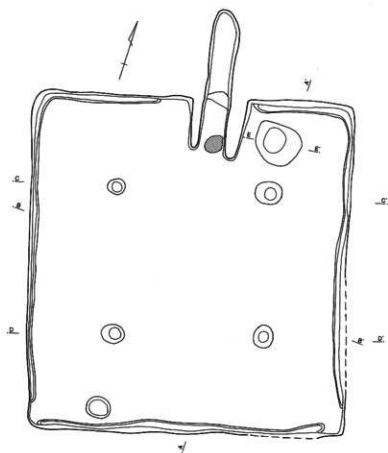
第30号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.0	4.5		BCEGHJ	B	橙	100	
2	坏	15.0	4.9		BCEGH	A	橙	90	二次被熱
3	坏	13.0	4.7		BCDEGH	B	橙	100	
4	坏	14.3	4.8		BCEGH	B	橙	50	
5	坏	15.2	5.6		BCGH	B	橙	100	
6	坏	13.2	4.6		BCEGH	B	橙	100	
7	坏	(13.8)	5.2		BCEGH	A	橙	40	二次被熱
8	坏	14.5	4.9		BCEGH	A	黒	90	黒色処理 体部外面ケズリ後ミガキ
9	甕	18.6	31.2	7.4	BCEGH	B	橙	85	カマド 木葉痕
10	甕	19.0	34.0	8.2	BCEGH	A	橙	95	カマド 内面黒色粒子砥平行に付着
11	甕	17.0			BCEGH	A	橙	70	
12	鉢	12.1	10.9	6.8	BCGH	A	赤	85	二次被熱顯著
13	瓶	14.8	12.5	4.3	BCDEGH	B	橙	100	孔径2.6cm
14	瓶	27.7	31.6	9.7	BCEGH	B	橙	100	
15	甕	(23.8)			BCDEGH	A	橙	35	内面タテミガキ
16	甕			7.4	BCGH	A	橙	70	木葉痕

第55图 第30号住居跡出土遺物



第56図 第37号住居跡



第37号住居跡土層註

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量
酸化鉄粒子多量
- 2 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子
・酸化鉄粒子少量
- 3 黒褐色 炭化物主体（炭化物層）
- 4 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量
酸化鉄粒子多量
- 5 暗灰褐色 焼土粒子・焼土ブロック多量
炭化物粒子微量
- 5' 暗灰褐色 焼土粒子少量
- 6 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
酸化鉄粒子多量
- 7 黒褐色 炭化物主体（炭化物層）
- 8 暗褐色 炭化物粒子多量

柱穴土層註

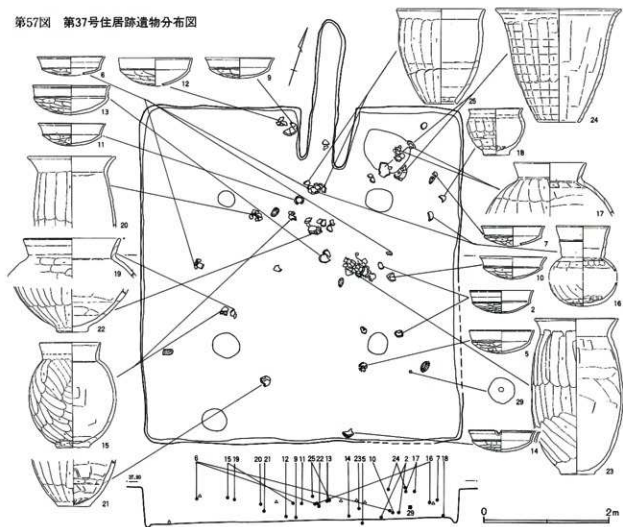
- 1 褐色 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 2 褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 3 黄褐色 しまり強し

貯蔵穴土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子微量
- 2 灰褐色 炭化物粒子少量
- 3 黒色 炭化物粒子・煎焼焼土ブロック多量
- 4 灰褐色 炭化物粒子微量
- 4' 灰褐色 炭化物粒子少量

0 2m

第57図 第37号住居跡遺物分布図



覆土を切る噴砂が確認されたが、住居跡形態を壊す程の影響は認められなかった。コーナー部のみ断絶する壁溝が通る。

主柱穴の深さはP 1=0.54m、P 2=0.38m、P 3=0.49m、P 4=0.50mである。柱間はP 1-2.27m-P 2-2.37m-P 3-2.33m-P 4-2.45m-P 1であった。P 3、4覆土は柱痕状を呈していた。

貯蔵穴はカマド右側に位置する。平面形態は不整形形で径0.74×0.64m、深さ0.50mであった。

カマドは北壁中央僅かに東よりに構築され、燃焼部長1.00m、同幅0.35mであった。煙道部長は1.27m、同幅0.34mであった。床面と同レベルの燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に至る。煙道部底面は傾斜していた。袖内面および火床面の被熱硬化が顕著であった。

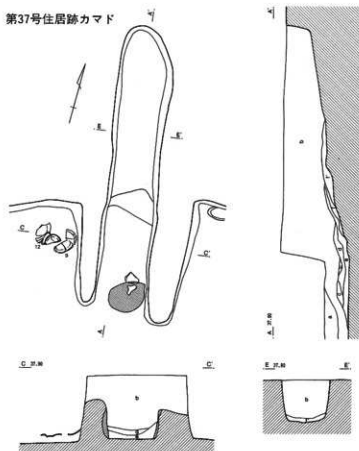
出土遺物 (第59・60図)

遺物の出土状況は覆土からのものが主体であった。特に覆土第3層の炭化物層からの出土量が多かった。カマド内、貯蔵穴内からは残存率の高い遺物は出土しなかった。

環はすべて須恵器蓋模倣である。2は外面の黒色処理が観察できた。13の口縁端部には棒状の押圧痕が残るが、配列は不規則で、成形段階あるいは乾燥段階のアクシデンタルなものと思われる。

16の壺は破砕後の二次被熱が顕著である。24の甌は成形時の輪積み痕が明瞭に残る。他の住居跡からは出土していない土玉が3個体出土している。貝塚穴底泥岩も1点出土している。編物石は覆土上層から4個体出土している。

第58図 第37号住居跡カマド

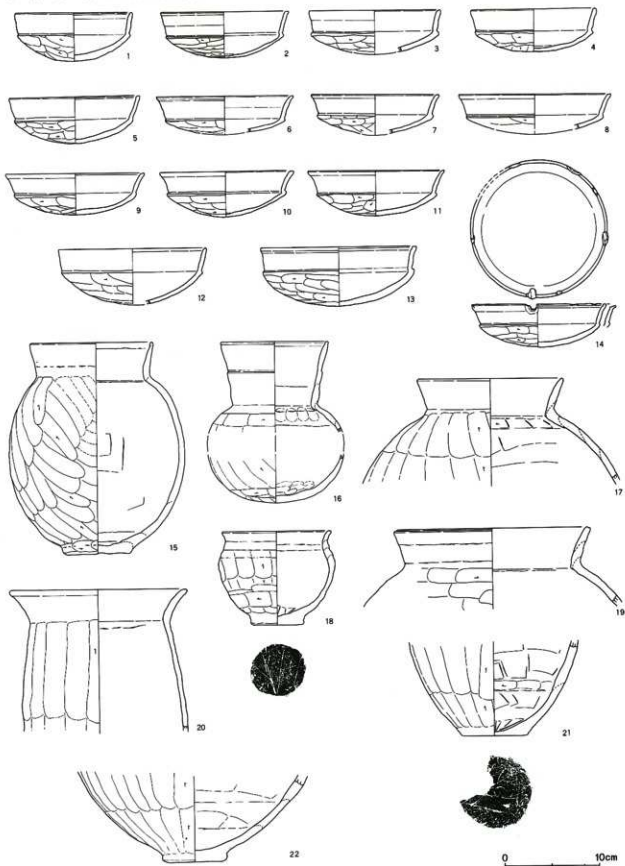


- 第37号住居跡 カマド土層註
- a 暗灰褐色 純土粒子・炭化物粒子微量
 - b 暗灰褐色 純土粒子少量 炭化物粒子微量
 - c 赤褐色 純土ブロック主体
 - d 灰褐色 灰多量 純土粒子少量
 - e 灰色 灰・純土粒子・純土ブロック多量 (灰層)
 - f 暗灰褐色 (灰層) 純土粒子少量
 - f' 暗灰褐色 (灰層)

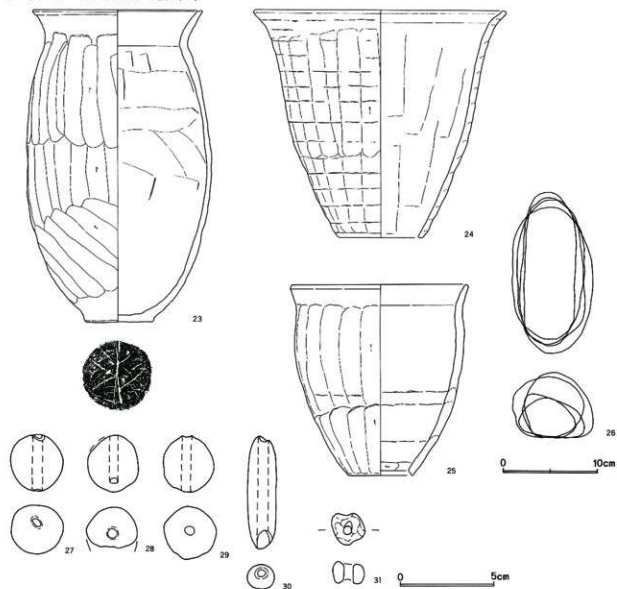
第37号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(12.6)	5.1		BCEGH	B	橙	40	
2	環	13.6	4.9		BCEGH	A	黒	80	外面黒色処理
3	環	(14.0)	(4.7)		BCEGH	B	橙	20	
4	環	13.4	4.5		BCEGH	B	橙	60	
5	環	14.0	5.0		BCEGH	A	橙	90	
6	環	14.6	(4.1)		BCDEGH	B	橙	65	破碎後二次被熱
7	環	(13.7)	(4.3)		BCDEGH	A	橙	20	
8	環	(16.2)	(4.2)		BCEGH	A	橙	20	
9	環	14.8	4.4		BCDEGH	B	橙	90	
10	環	14.2	4.8		BCDEGH	C	橙	70	
11	環	14.4	4.8		BCEGH	B	橙	95	
12	環	15.8	(6.0)		BCEGH	B	橙	85	体外外面凹形に二次被熱
13	環	16.6	6.3		BCDEGH	B	橙	70	口縁内面 沈線
14	環	14.4	4.5		BCEGH	B	橙	90	口縁部7箇所凹み
15	壺	(13.1)	22.5	(7.0)	BCEGH	B	鈍橙	45	底部ケズリ
16	壺	11.4	(17.2)		BCEGH	B	橙	25	破碎後二次被熱
17	壺	(15.6)			BCEGH	B	橙	50	
18	壺	(11.6)	10.0	(5.6)	BCEGH	B	鈍橙	40	木葉痕
19	壺	21.0			BCEGH	B	橙	15	
20	壺	19.0			BCEGH	B	明赤褐	60	破碎後二次被熱
21	壺			7.0	BCEGH	C	鈍黄橙	60	木葉痕
22	壺			7.0	BCH	A	鈍赤褐	85	
23	壺	18.1	33.1	7.2	BCEGH	B	鈍橙	90	木葉痕
24	甌	(27.2)	24.2	(8.9)	BCEGH	B	橙	60	

第59图 第37号住居跡出土物(1)



第60図 第37号住居跡出土遺物(2)



第37号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
25	甌	18.9	20.2	6.6	BCEGH	C	鈍黄橙	70	
26	編物石								4個体
27	土玉	縦3.02	横2.89	重23.53					一部欠損
28	土玉	縦(2.95)横(2.79)	重13.80						
29	土玉	縦2.98	横2.75	重23.60					
30	土錘	長6.00	径1.58	重13.24					
31	貝殻穴底泥岩			重1.52					

第45号住居跡 (第61・62図)

第45号住居跡はF-9、10グリッドに位置する。他遺構との重複はなかったが、第37、56号住居跡と極めて近接する。

主軸方向はN-82°-Eを指す。主軸長3.45m、副

軸長3.70mであり、方形を呈する。覆土は各層の流入から自然堆積と考えるが、焼土ブロックを多量に含有する第3層が認められた。南西コーナー部のみ断絶する壁溝が巡る。

主柱穴の深さはP1=0.65m、P2=0.55m、P3

=0.50m、P4=0.60mである。柱間はP1-1.58m-P2-1.75m-P3-1.60m-P4-1.72m-P1であった。柱穴覆土は柱痕を示すものと考える。

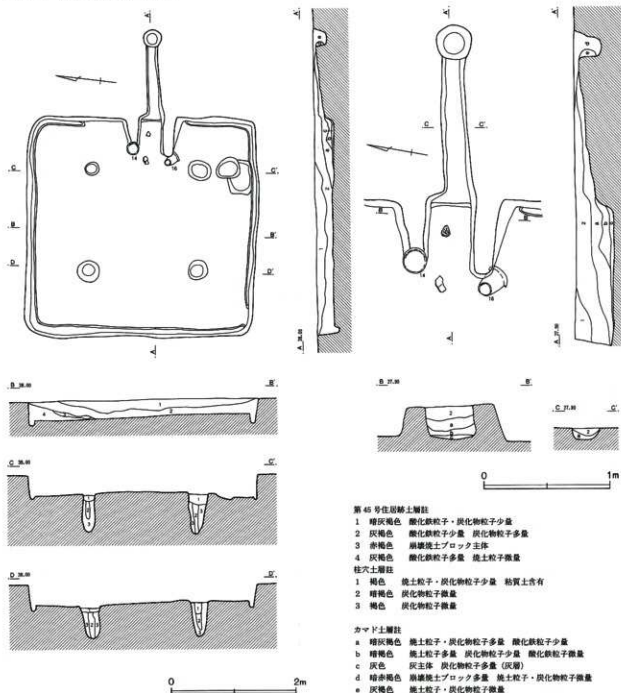
貯蔵穴はP1に隣接する。深さ0.12mと浅く、平面形態はやや不整で段を有する。

カマドは東壁中央に構築され、燃焼部長0.55m、同幅0.34mであった。煙道部長は1.42m、同幅0.15mで

あった。床面と同レベルの燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に至る。煙道部は緩やかに傾斜し、先端に煙出しピットを有する。

左袖の先端からは14の甕、右袖先端からは16の甕が逆位で検出された。いずれも胴部下半を欠損する。袖補強材と想定される。燃焼部ほぼ中央には河原石裂の支脚が埋設されていたが、カマド内部からの遺物の出

第61図 第45号住居跡・カマド



第45号住居跡土層註

- 1 暗灰褐色 酸化鉄粒子・炭化物粒子少量
- 2 灰褐色 酸化鉄粒子少量 炭化物粒子多量
- 3 赤褐色 麻織土ブロック主体
- 4 灰褐色 酸化鉄粒子多量 焼土粒子微量

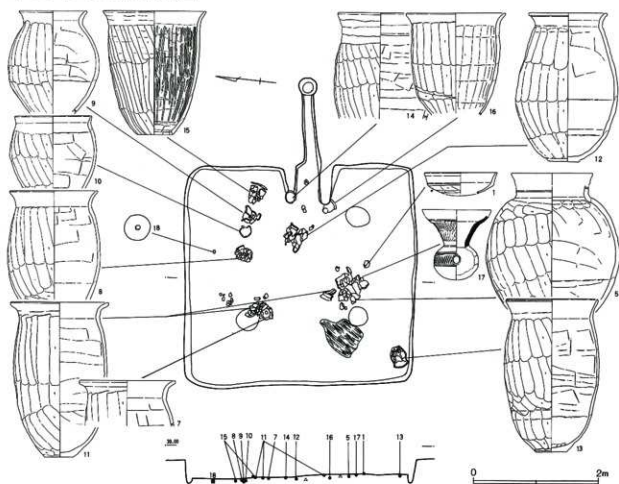
柱穴土層註

- 1 褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量 粘質土含有
- 2 暗褐色 炭化物粒子微量
- 3 褐色 炭化物粒子微量

カマド土層註

- a 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子多量 酸化鉄粒子少量
- b 暗褐色 焼土粒子多量 炭化物粒子少量 酸化鉄粒子微量
- c 灰色 灰土体 炭化物粒子多量 (灰層)
- d 暗赤褐色 麻織土ブロック多量 焼土粒子・炭化物粒子微量
- e 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量

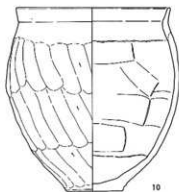
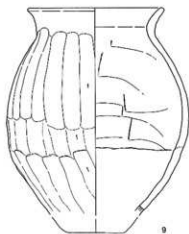
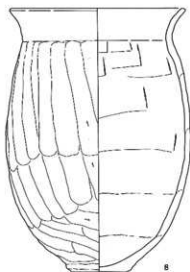
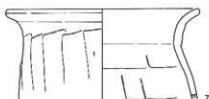
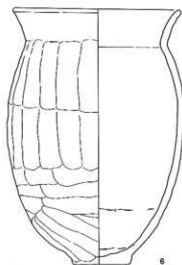
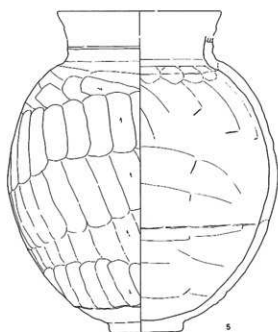
第62図 第45号住居跡遺物分布図



第45号住居跡出土遺物観察表

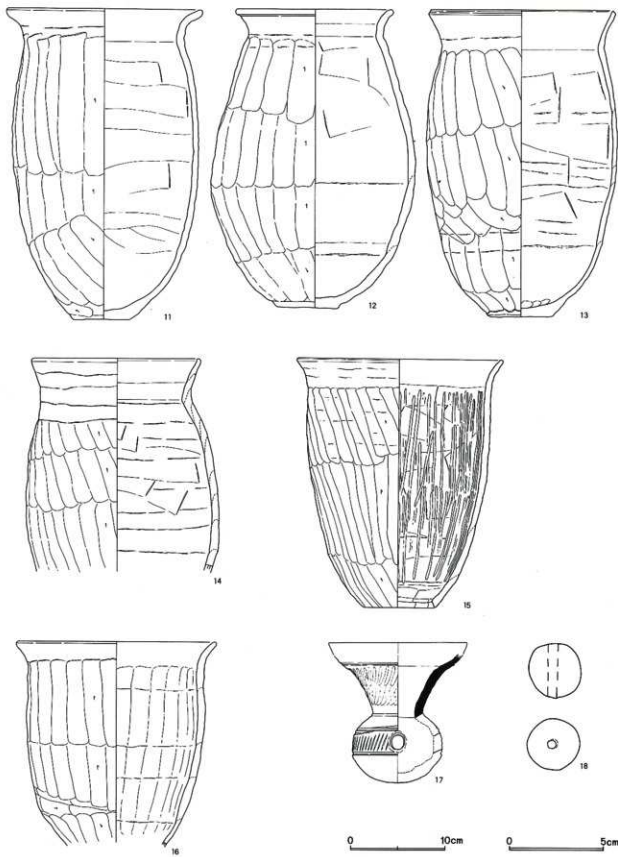
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(15.8)	(5.0)		BCDEGH	B	橙	25	
2	環	(16.1)	(5.0)		BCEGH	B	橙	25	
3	環	(15.2)	(5.4)		BCEGH	B	橙	30	
4	環	13.2	(4.6)		BCEGH	B	橙	20	
5	壺	(17.5)	(34.2)	7.8	BCDEGH	A	鈍橙	40	木葉灰
6	甕	18.0	27.0	6.1	BCEGH	B	橙	65	木葉灰
7	甕	20.6			BCEGH	B	橙	70	
8	甕	18.8	27.8	6.0	BCDEGH	B	橙	85	
9	甕	14.5	(23.8)	(6.0)	BCEGH	B	鈍橙	70	P 4 覆土
10	甕	16.3	19.4	6.2	BCDEGH	B	橙	90	
11	甕	21.0	32.8	6.2	CDEGH	A	橙	85	
12	甕	16.8	31.6	6.6	BCEGH	B	橙	85	
13	甕	20.0	32.4	7.0	BCDEGH	A	鈍橙	90	
14	甕	18.2			BCGH	B	鈍橙	100	左袖補強材
15	甕	22.1	26.4	7.5	BCDEFGH	B	鈍赤褐	90	
16	甕	21.4			BCEGH	B	橙	100	右袖補強材
17	須恵器地				C	C	灰	90	頭部梅播波状文浅く乱雑 角礫多
18	土玉	縦2.97	横2.75	重22.96					

第63図 第45号住居跡出土遺物(1)



0 10cm

第64図 第45号住居跡出土遺物(2)



土はなかった。袖内面の被熱硬化は顕著であった。

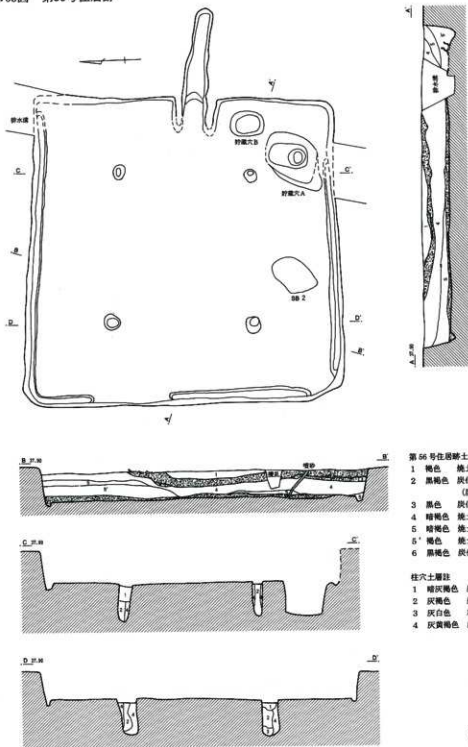
南西の床面直上からは炭化物の集中箇所が検出されたが、付近に焼おおよび被熱硬化面等はなかった。

出土遺物 (第63・64図)

遺物は床面直上から多量に出土した。出土器種組成

としては甕が特に多く10個体出土したが、坏が少ない傾向が伺える。凶化した坏もいずれも残存率は低い。9の甕はP4覆土上層から出土した。17の須恵器造は口縁部を欠損する。器壁は厚い。頸部に乱雑な櫛描波状文を施文する。

第65図 第56号住居跡



第56号住居跡土層註

- 1 褐色 粘土・炭化物粒子多量
- 2 黒褐色 炭化物主層 粘土粒子・粘土ブロック含有 (炭化物層)
- 3 黒色 炭化物主層 (炭化物層)
- 4 暗褐色 粘土・炭化物粒子含有
- 5 暗褐色 粘土・炭化物粒子多量 炭化材含有
- 6 褐色 粘土・炭化物粒子多量 炭化材含有
- 7 黒褐色 炭化物主層 粘土粒子多量 (炭化物層)

柱穴土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物少量 粘土粒子微量
- 2 灰褐色 炭化物少量
- 3 灰白色 粘土質 炭化物粒子少量
- 4 灰黄褐色 炭化物粒子微量 しまり強し

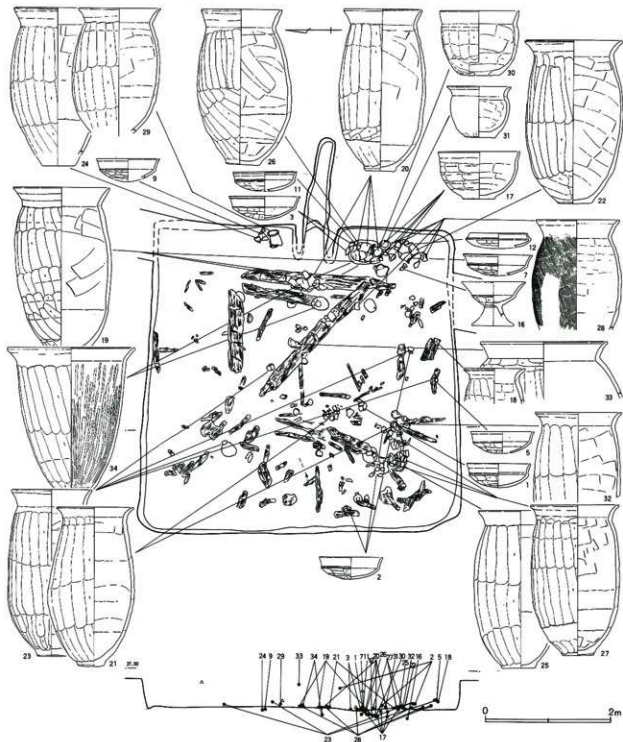
第56号住居跡 (第65～67図)

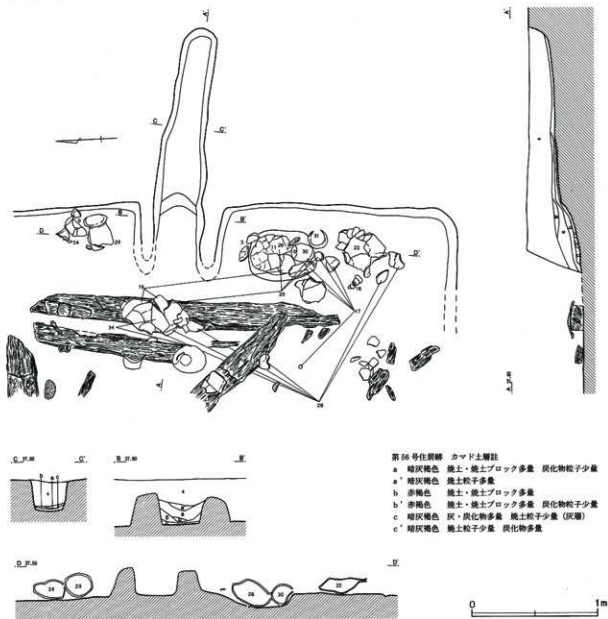
第56号住居跡はF-10グリッドに位置する。主軸方向はN-92°-Eを指す。カマド煙道部は住居跡主軸からやや南にぶれる。主軸長4.80m、副軸長4.96mであり、方形を呈する。壁面、床面、カマドの袖の一部

を排水溝により壊されていた。東壁際を除いて、壁溝が断続的に巡る。

覆土上層の第2、3層は炭化物層である。また床面直上の炭化材に伴う第6層も炭化物、焼土粒子を多量に含有していた。また覆土を切る噴砂が検出されたが、

第66図 第56号住居跡遺物分布図





住居跡形態および床面を大きく壊すほどの影響は認められなかった。

主柱穴の深さはP1=0.55m、P2=0.57m、P3=0.56m、P4=0.58mと近似した数値を示す。柱間はP1-2.35m-P2-2.28m-P3-2.38m-P4-2.10m-P1であった。

貯蔵穴はカマド右側から2基検出された。貯蔵穴Aは上位で不整な段を有する。径0.86×0.78m、深さ0.68mであった。遺物は出土しなかった。

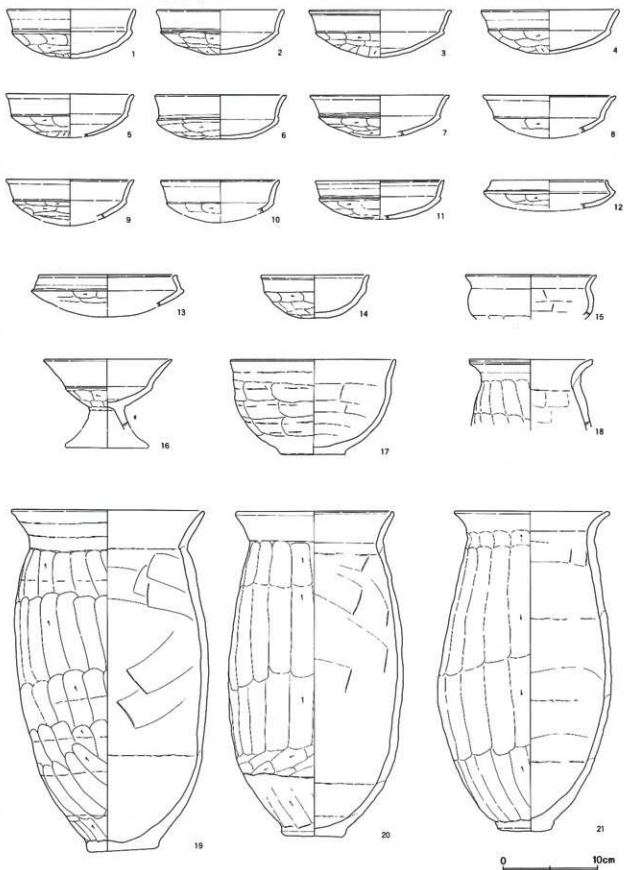
貯蔵穴Bは平面形懸隔円方形を呈し、径0.34×0.32

mである。深さは0.15mと浅かった。底面直上から多量の遺物が出土した。

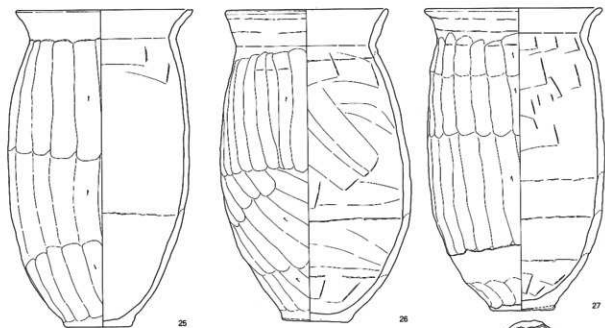
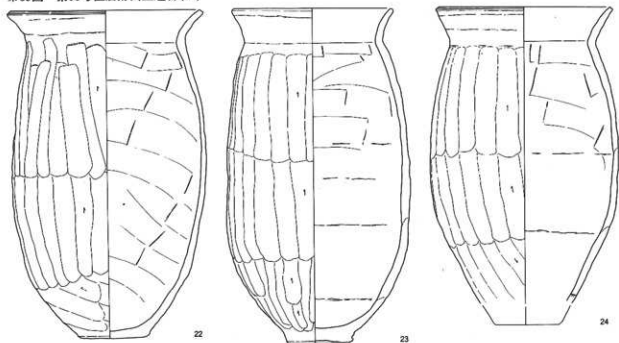
カマドは東壁ほぼ中央に構築される。両袖先端が排水溝により壊されていた。床面と同レベルの燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は水平であった。燃焼部長0.67m、同幅0.31mであった。煙道部長は1.32m、同幅0.30mであった。なおカマド内部からは遺物は出土していない。

床面直上からは多量の炭化材が出土した。特にカマド前方部に幅40cm、厚さ10cm内外の炭化材が集中して

第68図 第56号住居跡出土遺物(1)

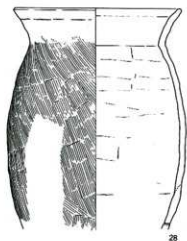


第69図 第56号住居跡出土物(2)

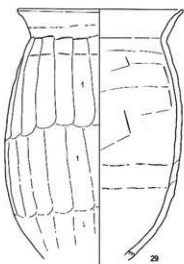


0 10cm

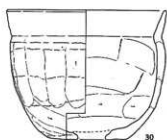
第70図 第56号住居跡出土遺物(3)



28



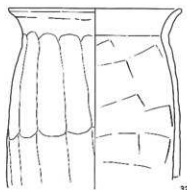
29



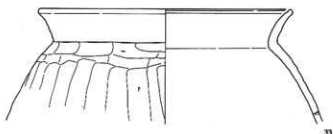
30



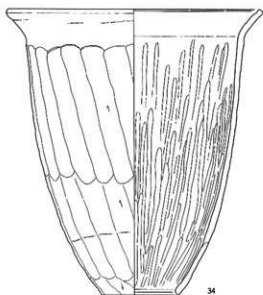
31



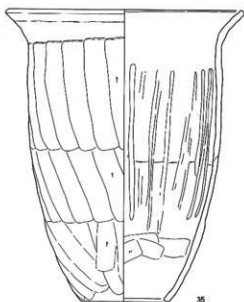
32



33



34



35



36



37



38



39

0 10cm

0 5cm

第56号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	13.8	5.2		BCDEGH	C	橙	95	
2	環	13.6	4.6		BCDGH	B	橙	90	
3	環	15.2	5.0		BCDEGH	A	明赤褐	95	
4	環	14.8	4.7		BCDEGH	C	橙	80	
5	環	13.6	(4.6)		BCEGH	B	橙	65	
6	環	14.0	4.7		BCEGH	A	橙	80	二次被熱
7	環	(15.0)	(4.5)		BCEGH	A	明赤褐	20	
8	環	(14.2)	(4.5)		BCEGH	B	橙	20	
9	環	(13.7)	(4.9)		BCGH	A	灰褐	25	
10	環	(12.6)	(4.5)		BCEGH	B	橙	15	
11	環	(13.8)	(4.1)		B	A	明赤褐	20	貯蔵穴B
12	環	(12.4)	(3.3)		BCEH	A	橙	15	
13	環	(14.8)	(4.4)		BCDEGH	B	橙	30	
14	環	(11.6)	4.5		BCEGH	C	鈍橙	30	粗製
15	鉢	(14.0)			BCEGH	A	鈍赤褐	15	
16	高環	13.6	(9.3)	(8.9)	BCDEFGH	B	橙	80	接合部器面調整により隆帯状
17	鉢	17.6	10.0	6.8	BCEGH	B	鈍橙	90	貯蔵穴と接合 底部不定ケズリ 二次被熱顯著
18	甕	(13.2)			BCGH	A	明赤褐	25	端部沈線状
19	甕	20.7	36.3	7.5	BCEGH	B	鈍橙	65	
20	甕	17.0	34.5	6.5	BCEGH	B	鈍黄橙	75	炭化材直上・貯蔵穴B
21	甕	(16.5)	33.8	(5.8)	BCEGH	C	灰褐	50	
22	甕	20.9	34.7	7.6	BCDEGH	B	橙	90	木葉痕
23	甕	17.2	35.5	7.0	BCEGH	B	橙	90	
24	甕	19.0	(33.5)	(6.9)	BCEGH	B	鈍黄橙	65	
25	甕	19.0	33.6	7.0	BCEGH	B	橙	80	木葉痕
26	甕	17.4	33.0	7.2	BCEGH	B	橙	95	貯蔵穴B 木葉痕
27	甕	18.9	31.8	6.6	BCDEGH	B	鈍黄橙	85	底部 ドーナツ状貼付後粘土粒貼付
28	甕	(17.7)			BCEFGH	A	橙	65	炭化材直上
29	甕	17.6			BCEGH	B	鈍褐	70	
30	甕	(17.0)	13.7		BCEGH	B	鈍橙	100	貯蔵穴B 焼成後穿孔 転用瓶 粘土帯接合痕明瞭
31	甕	13.7	10.9		BCEGHJ	B	橙	100	
32	甕	18.4			BCEGH	C	鈍黄橙	85	
33	甕	(27.4)			BCEGH	B	鈍赤褐	25	
34	甕	27.4	30.3	8.2	BCEGH	B	橙	95	炭化材直上・貯蔵穴B
35	甕	(25.4)	31.0	(9.4)	BCEGH	B	鈍黄橙	30	
36	編物石								3個体
37	土鉢	長(3.26)	径1.63	重(6.23)					欠損
38	管玉	長(0.95)	径(0.92)	重(0.63)					碧玉製 欠損

検出された。また住居跡西半からは幅10cm内外の炭化材が多く出土した。それらは住居跡中央に向かっていく傾向もみうけられる。ただし床面に顕著な被熱硬化部は認められなかった。

出土遺物 (第68~70図)

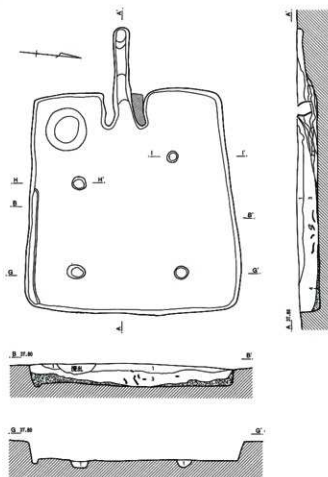
遺物は床面全域から出土したか特に貯蔵穴周辺から集中して出土した。カマド前方の炭化材直上から出土した土器もある。なお炭化材直下からの遺物の出土はなかった。したがって住居跡焼失後に廃棄した遺物もあると思われる。また2の環、33の甕口縁部は覆土上

層出土である。

出土土器組成を概観すると長胴甕の比率が高く、12個体を数える。最大径を胴部中位に有し、口縁部の屈曲が弱い個体が多い。27の甕底部はドーナツ状に粘土を貼付けた後に粘土粒を7ヶ所に貼付けて安定させている。28は外面刷毛目調整である。30は焼成後に底部穿孔されたものである。甕に転用されたと思われる。

出土した環は蓋模倣が主体を占める。口縁部が大きく外傾し上位で外反するものが多い。編物石3個体、土鉢は1個体出土した。38は碧玉製管玉である。

第71図 第42号住居跡・カマド



第42号住居跡土層註

- 1 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子・酸化鉄粒子少量
- 2 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子・酸化鉄粒子多量
- 3 灰白色 灰主体 炭化物・焼土粒子少量
- 4 黒褐色土 炭化物主体 焼土粒子少量(炭化物層)

柱穴土層註

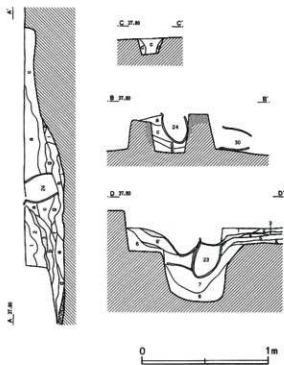
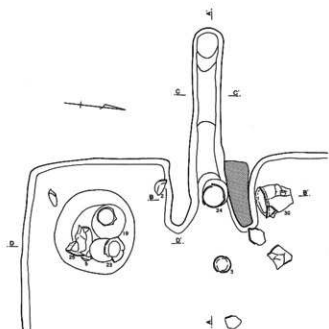
- 1 灰褐色 炭化物粒子微量 酸化鉄粒子多量

貯蔵穴土層註

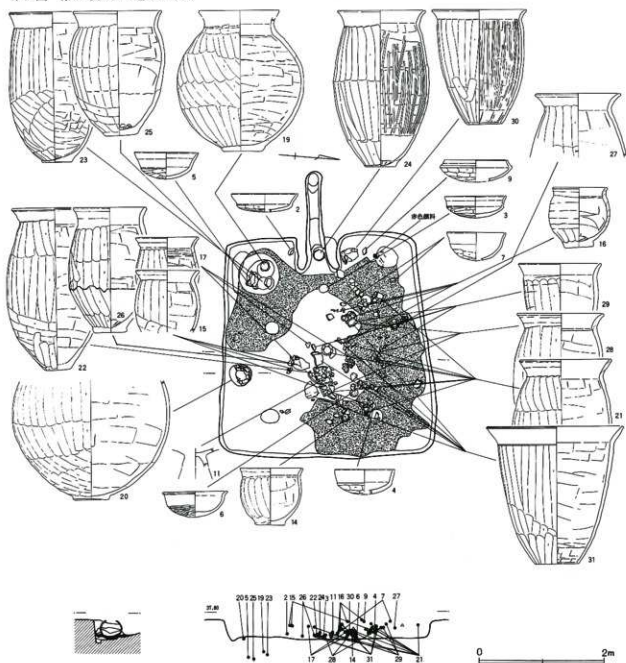
- 1 住居跡層土1層
- 2 住居跡層土2層
- 3 住居跡層土3層(灰層)
- 4 カマド土層
- 5 カマドc層
- 6 住居跡層土4層(炭化物層)
- 6' 炭化物やや多量
- 7 黒褐色 炭化物主体 骨片含有
- 8 黒褐色 炭化物多量

カマド土層註

- a 赤褐色 ローム土主体 焼土ブロック・炭化物粒子・焼土粒子含有
- b 褐色 焼土粒子・炭化物粒子・灰含有 焼土ブロック少量
- c 黒褐色 炭化物主体 焼土粒子・炭化物粒子・ローム土含有
- c' 黒褐色 赤褐色土ブロック多量
- d ローム土主体 炭化物粒子・焼土粒子含有
- e 黒褐色 炭化物主体 焼土粒子・ローム土含有
- f 赤褐色 ローム土主体 炭化物粒子・焼土粒子含有
- g 赤褐色 焼土・焼土ブロック主体(灰持層厚土)
- h 灰褐色 灰主体 焼土粒子・焼土ブロック含有(灰層)
- i 褐色 焼土・炭化物粒子少量



第72図 第42号住居跡遺物分布図



第42号住居跡 (第71・72図)

第42号住居跡はG-10グリッドに位置する。第2住居跡群中においても最も東端に位置する。したがって、本住居跡東側には遺構の稀薄域が広がり、第66号住居跡とは約24m離れている。

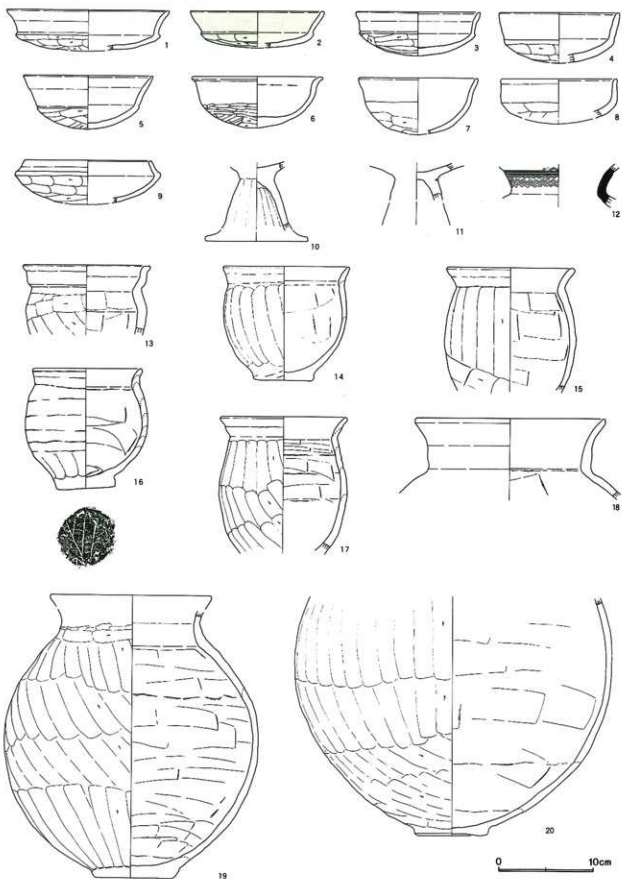
主軸方向はN-97°-Wを指す。主軸長3.57m、副軸長3.32mであり、やや不整な方形を呈する。

覆土下層には多量の炭化物を含有しているが、壁際

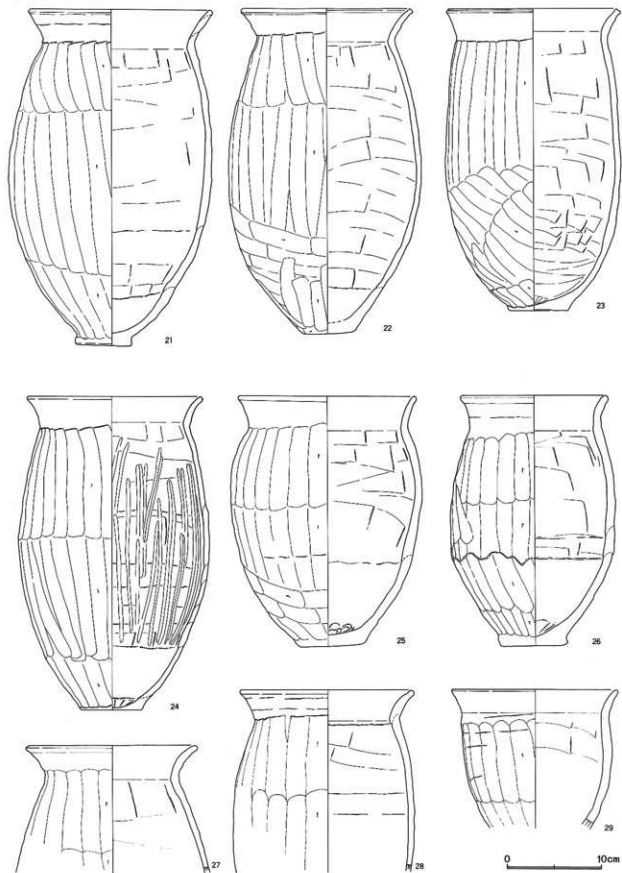
の堆積が厚い傾向にあった。いずれも炭化が顕著であり明瞭な柱材等は検出されなかった。また貯蔵穴覆土間層からも炭化物が多量に検出された。また灰白色の灰が貯蔵穴とカマド付近を中心に分布していた。

検出されたピットの深さはP1=0.13m、P2=0.13m、P3=0.12m、P4=0.14mと浅かった。ピットの配列はやや不規則であった。ピット間はP1-1.85m-P2-1.67m-P3-1.40m-P4-1.57m

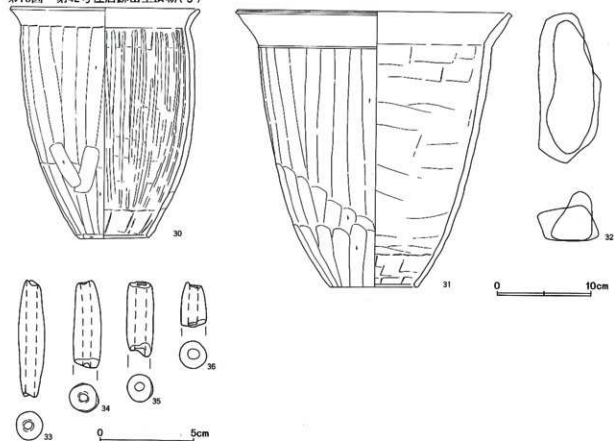
第73図 第42号住居跡出土遺物(1)



第74図 第42号住居跡出土遺物(2)



第75図 第42号住居跡出土遺物(3)



—P1であった。

カマド左側の貯蔵穴は、平面形態円形を呈する。径0.64×0.65m、深さ0.48mと深かった。覆土中からは甕3個体、坏1個体が出土したが、貯蔵穴底面からの出土はなかった。

カマドは西壁中央に構築されていた。燃焼部長0.47m、同幅0.23mであった。煙道部長は1.14m、同幅0.14mであった。床面と同レベルの燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は水平で先端には浅い煙出しピットを有する。袖内面は被熱硬化が顕著であった。また右袖上面も被熱硬化が顕著であった。住居跡焼失段階の痕跡と思われる。カマド内からは24の甕が出土した。右袖に密着しており、口縁部を右に傾けていた。支脚は検出されなかった。カマド覆土の遺存は良好であり、灰層の発達が顕著であった。また天井崩落土の識別も容易であった。また貯蔵穴付近に分布していた灰層も検出されたが、カマド崩

落後の堆積であると識別できた。

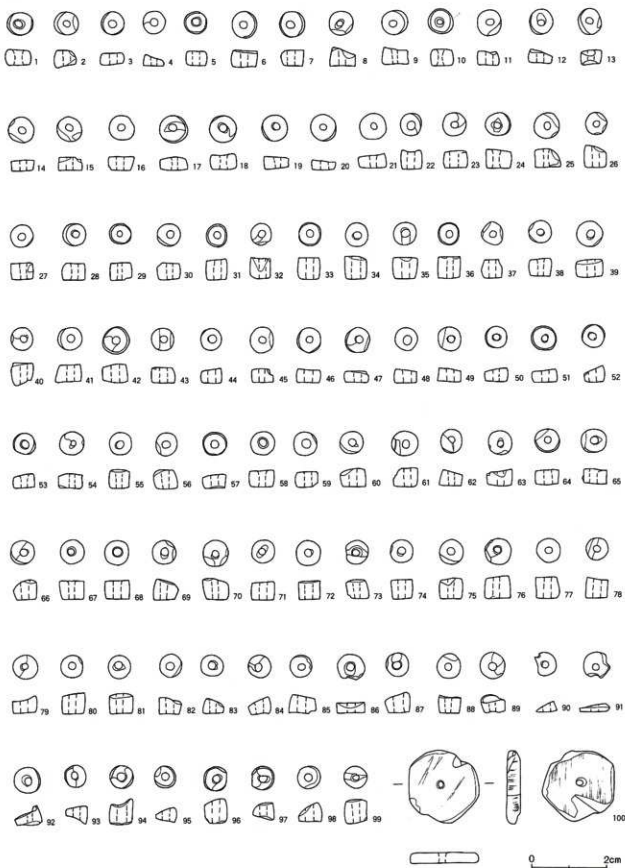
出土遺物(第73～76図)

遺物は覆土下層を中心に多量に出土したが、他住居跡と比較すると、破碎の度合いが強い傾向にあった。貯蔵穴内と床面ほぼ中央に遺物がやや集中する傾向にあった。

出土遺物の中では特に甕が多い傾向にある。小形、大形を含めると計13個体出土した。

6の坏は体部から口縁部に緩やかに移行し、口縁部上位で強く外反し突出する。体部の器壁は厚い。体部はミガキを施す。内外面赤褐色を呈する。肉眼観察で胎土に白色針状物質が確認されたため胎土分析を実施した。また内面からは計99個体の白玉と1個体の大形の白玉が出土した。出土状況は坏内面からとぐろを巻くように検出され、遺棄時には繋がれていたと思われる。なお6の坏の直下には炭化物層が1cmほど存在しており、炭化物層堆積後に設置された可能性が考えら

第76图 第42号住居跡出土遺物(4)



第42号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(17.2)	(4.4)		BCEGH	A	明赤褐	40	
2	坏	(14.3)	(3.9)		BCGH	A	灰褐	50	黒色処理 胎土分析 NO 8
3	坏	13.2	4.7		BCDEGH	A	橙	100	
4	坏	(12.8)	(5.3)		BCEGH	C	橙	65	
5	坏	13.8	5.7		BCDEFG	B	橙	100	貯蔵穴 胎土分析 NO 7
6	坏	14.0	5.5		BCGH	A	赤褐	100	白色非物質含有 体部 ヘラミガキ 胎土分析 NO10
7	坏	(12.8)			BCEGH	B	橙	45	胎土分析 NO 6
8	坏	(12.4)	(4.8)		CEH	C	橙	15	
9	坏	(13.6)	(4.1)		BCEGH	B	明赤褐	45	胎土分析 NO 9
10	高坏				BCDG	A	橙	30	
11	高坏				BCEGH	A	橙	40	
12	須恵器甕				C	A	黄灰	30	
13	甕	(13.6)			BCEGH	A	明赤褐	30	
14	甕	13.5	12.0	6.3	BCEGH	B	鈍橙	95	二次被熱
15	甕	13.7			BCEGH	B	橙	40	
16	甕	11.8	12.7	6.2	BCEGH	B	鈍黄橙	80	木葉灰
17	甕	13.6			BCEGH	B	橙	40	
18	甕	(20.4)			BCDEGH	B	橙	25	
19	壺		30.0	8.0	BCGH	A	橙	100	貯蔵穴 内面斜位に黒変
20	壺			7.4	BCGH	A	鈍橙	90	
21	甕	19.4	35.5	6.2	BCEGH	C	鈍橙	65	
22	甕	18.3	34.6	5.7	BCEFGH	B	鈍橙	80	
23	甕	18.4	32.1	6.3	BCDEFGH	C	橙	95	貯蔵穴
24	甕	(18.9)	33.2	7.0	BCEGH	C	鈍赤褐	85	カマド 内面縦位ヘラミガキ
25	甕	19.0	26.5	6.8	BCEGH	A	暗赤褐	70	貯蔵穴 底部内面指頭圧痕明瞭
26	甕	15.8	26.4	6.6	BCGH	C	鈍黄橙	90	
27	甕	18.4			BCEGH	B	赤褐	35	
28	甕	18.6			BCEGH	B	鈍黄橙	40	
29	甕	17.8			BCEGH	B	橙	70	
30	甕	20.2	24.5	7.2	BCDEGH	C	鈍橙	90	
31	甕	29.5	29.5	(9.4)	BCEGH	A	鈍橙	80	
32	編物石								2個体
33	土錘	長6.12	径1.40	重14.79					
34	土錘	長(4.65)	径1.52	重10.94					欠損
35	土錘	長(3.98)	径1.54	重(9.26)					欠損
36	土錘	長(2.42)	径1.45	重4.53					欠損

れる。

また20の壺は内部に詰まった土層を観察したところ、住居跡下層の炭化物層と対応すると思われる炭化物が確認されたことから炭化物層堆積段階では床直に据え置かれていた可能性が高い。

北西コーナー部床面直上からは赤色顔料の小塊が出土している。土錘計4個体、編物石は2個体出土した。

第50号住居跡(第77図)

第50号住居跡はG・H-10グリッドに位置する。南北軸方向はN-12-Wを指す。南北軸長1.88m、副軸長2.52mであり、小形の長方形を呈する。

遺存状況は悪く、遺構深度は約8cmであった。壁溝、ピット等は検出されなかった。

カマドは北東コーナー部に構築されていたが、遺存状況は悪く、左軸は検出されなかった。またカマドの方向は住居跡の2辺の軸と一致していない。カマド長0.40m、同幅0.35mである。カマド内部からは遺物は出土しなかった。

出土遺物(第77図)

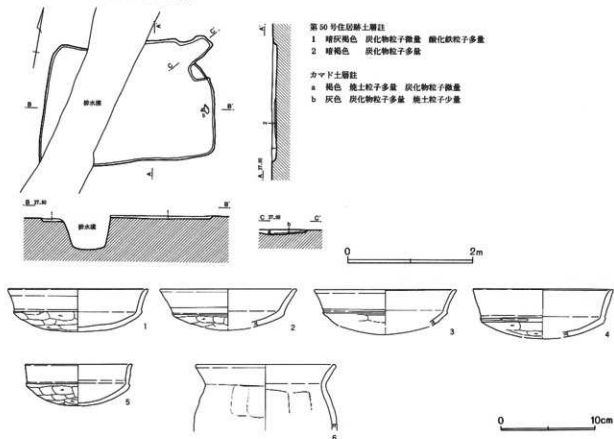
少量の遺物が床面直上から出土した。5個体の坏はいずれも須恵器蓋模倣である。4の後部には棒状工具痕が明瞭に残っていた。

第42号住居跡出土白玉計測表

番号	径×厚×孔径(mm)	重さ(g)
1	6.3×4.1×2.2	0.34
2	6.6×4.5×2.4	0.31
3	6.5×3.5×2.1	0.24
4	6.2×3.5×2.1	0.17
5	7.0×3.9×2.2	0.35
6	6.2×4.5×2.1	0.43
7	7.3×4.4×2.5	0.42
8	6.2×4.8×2.0	0.30
9	7.2×4.3×2.0	0.39
10	6.8×4.3×2.1	0.37
11	6.7×3.9×2.0	0.35
12	6.5×3.8×2.0	0.25
13	6.9×3.7×1.8	0.29
14	6.8×3.4×2.0	0.25
15	6.8×4.0×2.1	0.26
16	6.9×3.5×2.1	0.31
17	7.8×4.1×2.5	0.40
18	7.2×4.3×2.5	0.37
19	7.2×3.2×2.0	0.3
20	7.2×2.9×2.2	0.25
21	7.6×4.1×2.0	0.38
22	6.3×4.7×2.0	0.36
23	6.8×5.0×2.2	0.42
24	6.7×4.9×2.0	0.42
25	7.1×4.9×2.0	0.45
26	6.3×5.3×2.3	0.35
27	6.4×4.6×2.2	0.33
28	6.4×4.2×2.1	0.33
29	6.3×4.2×2.0	0.30
30	6.1×4.4×2.3	0.28
31	6.5×5.5×2.2	0.43
32	6.4×5.5×2.3	0.42
33	6.7×5.8×2.2	0.47
34	6.5×5.7×2.1	0.41
35	6.4×6.2×2.2	0.46
36	6.2×5.7×2.2	0.41
37	6.5×4.6×2.2	0.31
38	6.6×4.8×2.2	0.40
39	7.0×4.9×2.0	0.43
40	6.5×5.8×2.1	0.39
41	6.4×5.0×2.1	0.35
42	7.3×4.9×2.2	0.45
43	6.9×4.8×2.2	0.32
44	6.5×3.7×2.2	0.00
45	6.7×3.9×2.1	0.31
46	6.2×3.6×2.0	0.27
47	7.0×3.3×2.3	0.28
48	6.8×3.5×2.1	0.25
49	6.5×3.7×1.9	0.27
50	6.3×3.4×2.2	0.23

番号	径×厚×孔径(mm)	重さ(g)
51	7.0×3.3×2.4	0.31
52	6.4×4.0×2.4	0.28
53	6.2×4.0×2.4	0.29
54	6.9×4.2×2.0	0.32
55	6.2×4.2×2.3	0.31
56	6.5×5.2×2.5	0.34
57	6.6×4.2×2.1	0.34
58	6.5×4.5×2.5	0.35
59	6.3×4.5×2.1	0.34
60	6.7×4.4×2.0	0.35
61	7.1×4.8×2.3	0.41
62	6.3×4.7×2.0	0.30
63	6.8×4.1×2.1	0.33
64	6.5×4.3×2.0	0.33
65	6.5×4.1×2.1	0.32
66	6.3×4.4×2.4	0.30
67	6.5×4.7×2.1	0.36
68	6.8×4.8×2.0	0.43
69	6.6×5.2×2.4	0.41
70	6.9×5.1×1.9	0.44
71	6.3×5.1×2.0	0.40
72	6.9×5.2×2.2	0.48
73	6.3×5.2×2.0	0.40
74	6.5×5.3×2.2	0.42
75	6.7×5.6×2.2	0.44
76	7.3×6.6×2.1	0.60
77	6.5×5.6×2.0	0.48
78	6.2×5.5×2.3	0.41
79	6.4×5.0×2.1	0.34
80	6.3×5.2×2.2	0.37
81	6.3×5.4×2.2	0.36
82	6.2×4.7×2.3	0.27
83	6.5×4.3×2.5	0.26
84	6.5×4.9×2.2	0.32
85	6.2×4.4×2.1	0.26
86	7.5×3.1×2.2	0.29
87	7.2×5.2×2.5	0.41
88	4.4×5.0×2.4	0.33
89	7.0×4.8×2.4	0.34
90	6.7×2.7×2.4	0.14
91	7.1×2.5×2.1	0.16
92	7.4×5.3×2.4	0.34
93	6.2×5.0×2.0	0.26
94	6.4×6.7×2.2	0.42
95	6.4×4.3×2.3	0.23
96	6.5×6.8×2.0	0.46
97	7.1×4.8×1.9	0.30
98	6.4×5.0×1.9	0.25
99	6.6×6.0×2.0	0.37
100	20.1×4.0×1.7	2.64

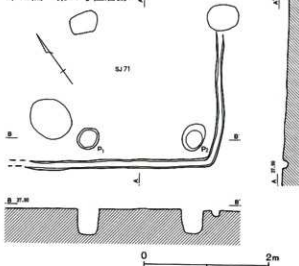
第77図 第50号住居跡・出土遺物



第50号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(15.0)	4.6		BCDEGH	B	鈍橙	35	稜部 棒状工具痕
2	坏	(14.6)	(4.3)		BCDEGH	C	橙	25	
3	坏	(15.2)	(4.3)		BCEGH	B	橙	30	
4	坏	(15.0)	(5.2)		BCDEGH	A	赤褐	15	
5	坏	11.4	4.5		BCDEGH	B	明赤褐	70	
6	甕	(15.1)			BCEGH	B	鈍橙	20	

第78図 第71号住居跡



第71号住居跡 (第78図)

第71号住居跡はH-9グリッドに位置する。遺存状況は悪く明瞭な壁面は検出されなかったが、ほぼ直角に曲がる溝が検出されたことから、これを壁溝と考え、住居跡と認定した。

南北軸方向はN-40°-Eを指す。推定住居跡範囲内からは2基のピットが検出された。深さはP1=0.40m、P2=0.39mと浅かった。ピット間はP1-1.68m-P2であった。また壁溝を壊してG-9グリッドピット列の東端が検出されたが、本住居跡を壊すピットと考えられる。少量の土師器片が検出されたが、図化できるものはなかった。

(5) 第3住居跡群

第3住居跡群は本調査区から検出された住居跡群のほぼ中央に位置する。確認面標高は37.9~38.0mである。周囲を他住居跡群に囲まれている状況を示している。ただし6号住居以南はやや住居跡が少なく、第1号溝に画されるように、第5、7住居跡群が分布する。

本群中における住居跡間の重複関係は67住→36住→59住、33住→29住、40住→59住、11住→10住である。

本群は13軒の住居跡からなるが、いわゆる隅カマドを有する小形の住居跡が3軒ある。また第9、67号住居跡からはカマドの造り替えが確認された。また第6号住居跡は南側からカマドが検出された。

本群中の住居跡の出土遺物を概観すると、上記した隅カマドを有するものからは口径11cm前後の小形の模倣環と口縁部が大きく外反し、胴部最大径を上位に有する甕が出土しており、本集落跡の新相段階の住居跡が所在していると言える。これは重複関係からも矛盾は認められない。

第59号住居跡 (第80図)

第59号住居跡はE・F・6・7グリッドに位置する。不手際にもプラン確認の段階で本住居跡を検出することが出来ず、第36号住居跡と認識して調査に着手した。覆土除去途中で第36号住居跡に帰属しない床面およびカマドが検出され、第59号住居跡と認定した。したがって壁面のほとんどは検出できなかった。

主軸方向はおおよそN-20°-Eを指す。主軸長3.63m、副軸長3.92mであり、方形を呈すると思われる。

詳細な覆土観察は出来なかった。

本住居跡に確実に伴う柱穴、貯蔵穴はなかった。

カマドは北壁中央に構築され、カマド長1.10m、煙道部幅0.21mであった。深く掘り込まれた燃焼部から緩やかに煙道部に至る。袖はなかった。灰層の発達が目撃された。カマド燃焼部からは遺物は出土しなかった。

出土遺物 (第81図)

図化した遺物は調査段階で本住居跡を認定した後に

出土したものである。8の環のみが完形で他は破片であった。編物石2個体、土鏝は2個体出土している。

第36号住居跡 (第80図)

第36号住居跡はE・F・6・7グリッドに位置する。主軸方向はN-81°-Wを指す。主軸長5.20m、副軸長6.00mであり、平面形態はやや台形状を呈する。

第59号住居跡が入れ子状に本住居跡の中央に位置する。両住居跡の床面はほぼ同レベルであった。また本住居跡は第67号住居跡を壊していた。

詳細な覆土の観察はできなかった。

主柱穴の深さはP1=0.82m、P2=0.97m、P3=0.67m、P4=0.80mである。柱間はP1-3.30m-P2-3.04m-P3-2.87m-P4-3.05m-P1であった。覆土は柱痕状を呈し、最下層からは灰白色の粘質土が検出された。

貯蔵穴はカマド右側の南西コーナー部より検出された。上位で不整な段を有する。径0.62×0.72m、深さ0.35mであった。

南西コーナー部付近のみ壁溝が検出された。

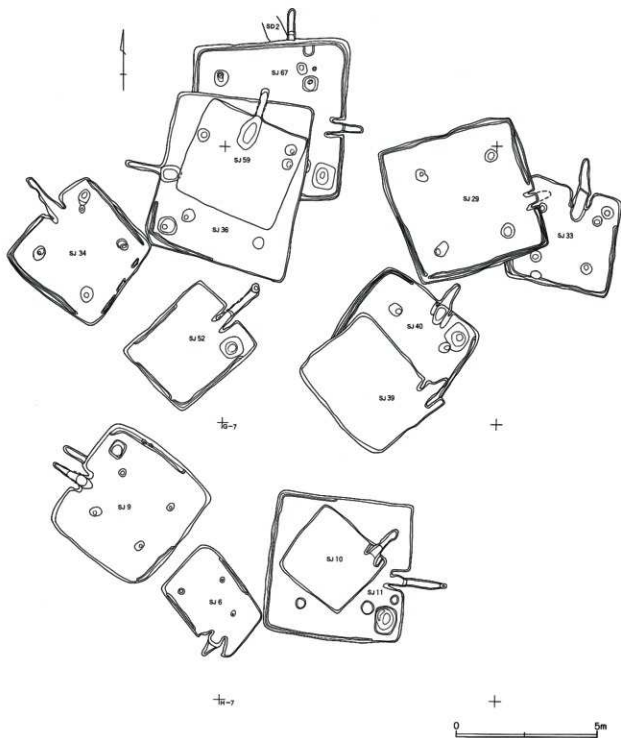
カマドは西壁のほぼ中央に構築されていた。袖は検出されなかった。煙道部長1.35m、同幅0.14mであった。床面から浅く掘り込まれた燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は僅かに傾斜していた。灰層の発達も顕著であった。

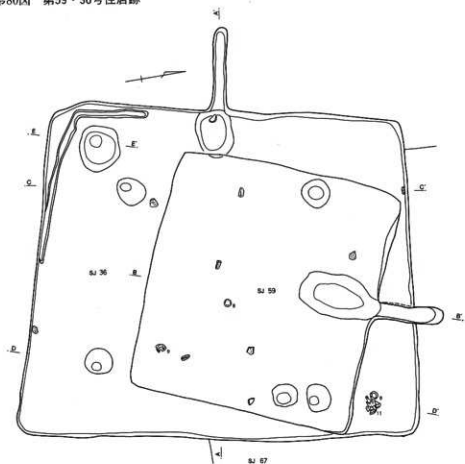
出土遺物 (第82図)

遺物は床面に散逸していたが、出土量は少なかった。8の環は器高が高く、口縁部も強く立ち上がるが成形調整とも雑で粗製である。11の甕は胴部上位に輪積み痕を明瞭に残す。15はミニチュア土器の胴部である。外面はヘラナデ調整である。16は土製支脚であるが、カマド内部からの出土ではない。17の須恵器甕の胴部破片は、焼成が不良で明赤褐色を呈する。5本単位の櫛形波状文が施される。編物石、土鏝は各1個体出土した。

なお図化し得た第59・36号住居跡の出土遺物は、両住居跡のものが混在していると思われる。

第79図 第3住居跡群全体図





第59・36号住居跡土層註

第59号住居跡

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子多量
焼土粒子少量

カマド土層註

- a 暗灰褐色 炭化物粒子
・焼土粒子・灰多量
b 暗灰褐色 炭化物粒子
・焼土粒子少量
c 極暗灰褐色 焼土粒子少量
炭化物粒子微量
d 灰褐色 灰・炭化物粒子少量
e 灰色 焼土ブロック・灰少量

第36号住居跡

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子
・焼土粒子少量

カマド土層註

- a 暗灰褐色 炭化物粒子少量
焼土粒子多量
b 灰褐色 焼土ブロック少量
c 暗灰褐色 焼土ブロック微量
d 暗灰褐色 灰多量
焼土ブロック・炭化物粒子少量

柱穴土層註

- 1 暗灰褐色 小礫少量
焼土ブロック微量
1' 暗灰褐色 灰白色粘質土少量
2 灰白色 粘質土 しまり強し
3 灰黄褐色 小礫少量
灰白色粘質土微量

貯蔵穴土層註

- 1 灰褐色 炭化物粒子少量

